

Oracle® Enterprise Performance Management System

User Security Administration Guide

リリース 11.1.2.3

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	7
第 1 章 Shared Services について	9
Shared Services とは?	9
Shared Services Console の起動	9
Shared Services Console の概要	10
ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索	11
第 2 章 EPM System セキュリティの概念	13
セキュリティ・コンポーネント	13
ユーザー認証コンポーネント	13
ネイティブ・ディレクトリ	14
ユーザー・ディレクトリ	14
プロビジョニング(役割ベースの認証)	14
役割	15
グローバルな役割	15
事前定義済役割	15
集約役割	16
ユーザー	16
デフォルトの EPM System 管理者	16
システム管理者	16
機能の管理者	16
グループ	17
第 3 章 アプリケーション・グループおよびアプリケーションでの作業	19
概要	19
アプリケーション・グループの使用	19
アプリケーション・グループの作成	20
アプリケーション・グループ・プロパティの変更	21
アプリケーション・グループの削除	21
アプリケーションの管理	22
アプリケーションの移動	22
アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー	23

複数のアプリケーションの削除	23
アプリケーションの削除	24
Essbase アプリケーション・アーティファクトのプロビジョニング	24
アプリケーションの参照	25
第4章 委任されたユーザー管理	27
委任されたユーザー管理について	27
管理者の階層	27
システム管理者	27
機能の管理者	27
委任された管理者	28
委任されたユーザー管理モードを使用可能にする	28
委任された管理者の作成	29
プランニング・ステップ	29
委任された管理者のユーザー・アカウント	29
委任プランの作成	29
委任された管理者のプロビジョニング	29
委任リストの作成	30
委任リストの変更	32
委任リストの削除	33
委任されたレポートの表示	34
第5章 ネイティブ・ディレクトリの管理	35
ネイティブ・ディレクトリ情報	35
デフォルトのネイティブ・ディレクトリ・ユーザーおよびグループ	35
ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理	36
ユーザーの作成	36
ユーザー・アカウントの表示および変更	37
ユーザー・アカウントの非アクティブ化	39
非アクティブ・ユーザー・アカウントのアクティブ化	39
ユーザー・アカウントの削除	40
ネイティブ・ディレクトリのユーザー・パスワードの変更	40
ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理	41
ネストされたグループ	41
グループの作成	42
グループの変更	44
グループの削除	46
役割の管理	46
集約役割の作成	46
集約役割の変更	47

集約役割の削除	48
ネイティブ・ディレクトリのバックアップ	49
第6章 プロビジョニングの管理	51
プロビジョニングについて	51
プロビジョニングを開始する前に	51
プロビジョニング・ステップの概要	52
管理ユーザーのプロビジョニング	52
EPM System ユーザーのプロビジョニング	53
グループのプロビジョニング	54
グループのプロビジョニング解除	54
監査セキュリティ・アクティビティおよびライフサイクル管理アーティファクト	55
監査データの手動での削除	56
アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択	57
削除間隔の変更	57
レポートの生成	58
プロビジョニング・レポートの生成	58
監査レポートの生成	59
移行ステータス・レポートの生成	60
ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート	61
第7章 タスクフローの管理	63
タスクフローについて	63
タスクフロー・コンポーネント	63
ステージ	63
リンク	64
変数	65
タスクフローを使用するための前提条件	65
タスクフローの作成および管理	65
「タスクフローの管理」画面へのアクセス	65
タスクフローの作成	66
タスクフローの編集	67
タスクフロー情報の表示	68
タスクフローのスケジュール	68
タスクフローの手動実行	69
タスクフロー・ステータスの表示および実行の詳細	69
タスクフロー・スクリプトの場所	70

付録 A. EPM System 役割	71
Foundation Services 役割	71
Shared Services 役割	71
Performance Management Architect 役割	73
Calculation Manager の役割	74
Financial Management マネージャの役割	74
Essbase の役割	74
Essbase Studio 役割	76
Reporting and Analysis 役割	76
Financial Management の役割	79
Disclosure Management 役割	81
Financial Close Management 役割	81
Account Reconciliation Management 役割	82
Planning 役割	82
Profitability and Cost Management 役割	85
標準 Profitability and Cost Management の役割	85
詳細 Profitability and Cost Management の役割	87
Performance Scorecard 役割	89
Strategic Finance 役割	90
Provider Services 役割	90
Data Integration Management 役割	90
FDM の役割	91
FDMEE の役割	91
Integrated Operational Planning 役割	92
 付録 B. EPM System のコンポーネント・コード	 93
 付録 C. EPM System 製品へのアクセス	 95
Shared Services へのアクセス	95
EPM Workspace へのアクセス	95
Administration Services コンソールへのアクセス	96
 用語集	 97
 索引	 101

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

1

Shared Servicesについて

この章の内容

Shared Services とは?	9
Shared Services Console の起動	9
Shared Services Console の概要	10
ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索	11

Shared Services とは?

Oracle Hyperion Foundation Services のコンポーネントである Oracle Hyperion Shared Services は、Oracle Enterprise Performance Management System 製品のためのセキュアな環境の構築を支援します。Shared Services を使用して、EPM System の配置のセキュリティを定義および管理します。Shared Services は、Oracle Hyperion Shared Services Console を使用して操作します。

すべての EPM System コンポーネントのユーザー認証方法、および製品リソースの使用の許可方法の定義は、Shared Services で行われます。

Shared Services Console の起動

Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace のメニュー・オプションを使用して、Oracle Hyperion Shared Services Console にアクセスします。

▶ Shared Services Console を起動するには:

1 次に移動します:

`http://web_server_name:port_number/workspace`

URL の中で、web_server_name は Oracle Hyperion Foundation Services が使用する Web サーバーが実行されているコンピュータの名前を示し、port_number は、Web サーバー・ポートを示します。たとえば、`http://myWebserver:19000/workspace` のようになります。

注: セキュアな環境の EPM Workspace にアクセスする場合、プロトコルとして `https` (`http` ではなく) を使用し、セキュアな Web サーバー・ポート番号を使用します。たとえば、`https://myserver:19043/workspace` のような URL を使用します。

2 「アプリケーションの起動」をクリックします。

注： ポップアップ・ブロックが原因で EPM Workspace が開かない場合があります。

3 「ログオン」で、ユーザー名とパスワードを入力します。

最初は、Shared Services Console へアクセスできる唯一のユーザーは、ユーザー名とパスワードが配置プロセス中に指定された Oracle Enterprise Performance Management System 管理者です。

4 「ログオン」をクリックします。

5 「ナビゲート」>「管理」>「Shared Services Console」を選択します。

Shared Services Console の概要

Shared Services Console は、ビュー・ペイン(アプリケーション管理ペインとも呼ばれる)とタスク・タブで構成されています。初めに Shared Services Console にアクセスすると、ビュー・ペインと「参照」タブが表示されます。

ビュー・ペインは、ネイティブ・ディレクトリおよびアプリケーション・グループなどのオブジェクトを選択できるナビゲーション・フレームです。通常は、ビュー・ペインで現在選択されている項目の詳細が「参照」タブに表示されます。その他のタスク・タブは、実行するタスクの必要に応じて開きます。たとえば、「レポート」タブはレポートを生成または表示するときに開きます。

現在の構成に応じて、Shared Services Console のビュー・ペインには既存のオブジェクトが一覧表示されます。これらのオブジェクトを展開すると、詳細を表示できます。たとえば、「ユーザー・ディレクトリ」ノードを選択すると、構成済のすべてのユーザー・ディレクトリが一覧表示されます。

オブジェクトを右クリックすると表示されるショートカット・メニューは、ビュー・ペインのオブジェクトに関連付けられています。

ビュー・ペインのオブジェクトに関連付けられたショートカット・メニューは、オブジェクトに対する操作を実行する最も早い方法です。ショートカット・メニューのオプションは、選択した対象に従って動的に変更されます。これらのオプションは、メニュー・バーのメニューからも使用できます。使用可能なメニュー・オプションを表すボタンがツールバーに表示されます。

注： ネイティブ・ディレクトリは Shared Services Console から管理されるため、ネイティブ・ディレクトリのショートカット・メニューで使用可能なメニュー・オプションの中には、他のユーザー・ディレクトリには使用できないものがあります。

次の機能が、Shared Services Console から使用できます：

- ユーザー・ディレクトリ構成
- シングル・サインオン構成
- ネイティブ・ディレクトリ管理
- 役割ベースのユーザーのアクセス制御の管理
- 監査構成およびレポート管理

- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理へのアクセスおよび製品のアーティファクトの検索

ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索

Shared Services Console では、構成されたユーザー・ディレクトリからのユーザーおよびグループの検索と、Oracle Hyperion Shared Services に登録されたアプリケーションの役割の検索が使用可能になります。

ユーザーを検索する場合、指定できる検索パラメータは、選択するユーザー・ディレクトリのタイプによって異なります。たとえば、ネイティブ・ディレクトリでは、すべてのユーザー、アクティブなユーザーおよび非アクティブなユーザーを検索できます。

「参照」タブに表示される検索ボックスは、ビュー・ペイン内の選択項目に基づいて検索コンテキストを表します。

▶ ユーザー、グループ、役割または委任リストを検索するには:

- 1 ビュー・ペインで、「ユーザー・ディレクトリ」を展開します。
- 2 検索するユーザー・ディレクトリから、次のいずれかを選択します。
 - ユーザー
 - グループ
 - 役割
 - 委任リスト

注: 役割および委任リストは、ネイティブ・ディレクトリへの検索でのみ使用可能です。

委任リストは、Shared Services が委任された管理モードの場合のみ使用可能です。詳細は、[第4章「委任されたユーザー管理」](#)を参照してください。

使用可能な検索フィールドが「参照」タブに表示されます。

3 ユーザーを検索するには:

- 1 「ユーザー・プロパティ」で、検索するユーザー・プロパティを選択します。

選択できるユーザー・プロパティは、選択したユーザー・ディレクトリのタイプによって異なります。たとえば、ユーザー名、名、姓、説明および電子メール・アドレスを検索できます。ネイティブ・ディレクトリでは、すべてのユーザー、アクティブなユーザーまたは非アクティブなユーザー(他のユーザー・ディレクトリのユーザーを検索中は使用できないオプション)を検索できます。ワイルドカード(アスタリスク)を使用した検索以外では、このプロパティ値が設定されていないレコードは検索されません。

検索可能なユーザー・プロパティ:

- LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ: ユーザー名、名、姓、説明および電子メール・アドレス
 - データベース・プロバイダ: ユーザー名
2. **オプション:** 「ユーザー・フィルタ」では、特定のユーザーを識別するためのフィルタを指定します。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。
 3. **オプション:** 「グループ内」では、検索を実行するグループを指定します。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。複数のグループを検索するには、セミコロンを使用してグループ名を区切ります。
 4. **ネイティブ・ディレクトリのみ:** 「表示」から、検索コンテキスト(「すべて」、「アクティブ」または「非アクティブ」)を選択します。
 5. 「ページ・サイズ」で、検索結果ページに表示するレコード数を選択します。
 6. 「検索」をクリックします。

4 グループを検索するには:

1. 「グループ・プロパティ」で、検索するプロパティを選択します。

注: Shared Services では、Oracle および SQL Server の役割をユーザー・ディレクトリのグループと同等とみなします。Shared Services では、ネストされた Oracle データベースの役割内の各役割を個々のプロビジョニング可能な別々のグループとみなします。Shared Services はネストされたデータベースの役割の間の関係を順守しません。

2. **オプション:** 「グループ・フィルタ」では、検索を制限するためにフィルタを入力します。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。
3. 「検索」をクリックします。

5 役割を検索するには:

役割の検索は、ネイティブ・ディレクトリでのみサポートします。

1. 「役割プロパティ」で、検索するプロパティを選択します。このプロパティがネイティブ・ディレクトリに指定されていないレコードは、ワイルドカード(アスタリスク)を使用した検索以外では検索されません。
2. **オプション:** 「役割フィルタ」では、検索を制限するためにフィルタを入力します。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。
3. 「検索」をクリックします。

6 委任リストを検索するには:

1. 「リスト名」では、検索文字列を入力します。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。
2. 「検索」をクリックします。

2

EPM Systemセキュリティの概 念

この章の内容

セキュリティ・コンポーネント	13
ユーザー認証コンポーネント	13
プロビジョニング(役割ベースの認証)	14

セキュリティ・コンポーネント

EPM System セキュリティは、ユーザー・アクセスと権限を制御する 2 つの補足的なレイヤーから構成されています:

- 13 ページの「ユーザー認証コンポーネント」
- 14 ページの「プロビジョニング(役割ベースの認証)」

ユーザー認証コンポーネント

EPM System ユーザーのプロビジョニング・データをチェックし、アクセス可能な EPM System コンポーネントを判別するには、その前にユーザーの認証が必要です。デフォルトでは、ユーザーがログイン画面へのユーザー名およびパスワードを入力し、プロビジョニングされたすべての EPM System コンポーネントへのシングル・サインオン(SSO)アクセスを取得します。

SSO は、EPM System 製品のユーザーが、セッションの開始時にログイン情報を 1 度のみ入力して、複数の製品にアクセスできるようにするセッションおよびユーザー認証プロセスです。SSO では、ユーザーがアクセスする各製品に別々にログインする必要がなくなります。

セキュリティを強化するには、事前に認証済のユーザーを EPM System に渡すことのできるセキュリティ・エージェントを使用して、EPM System コンポーネントを保護できます。また、EPM System セキュリティは、クライアント証明書認証、カスタム Java 認証および Kerberos などの他のメカニズムを使用して、強化することもできます。EPM System に対するインフラストラクチャの保護の確立の詳細については、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

EPM System コンポーネントは、構成済ユーザー・ディレクトリに対する認証されたユーザー・ログイン情報を確認します。コンポーネント固有のプロビジョニングと共にユーザー認証は、ユーザー・アクセスを EPM System コンポーネントに付

与します。プロビジョニング・マネージャは、EPM System コンポーネントに属するアーティファクトへのアクセス権をユーザーに付与します。

次の項では、SSO をサポートするコンポーネントについて説明します。

- [14 ページの「ネイティブ・ディレクトリ」](#)
- [14 ページの「ユーザー・ディレクトリ」](#)

ネイティブ・ディレクトリ

ネイティブ・ディレクトリとは、Shared Services がプロビジョニングのサポート、およびデフォルト・ユーザー・アカウント、作成する追加のユーザーおよびグループなどのシード・データの保管に使用するリレーショナル・データベースを指します。

ネイティブ・ディレクトリ機能:

- ネイティブ・ユーザー・アカウントの維持および管理
- ネイティブ・グループ・アカウントの維持および管理
- すべての EPM System プロビジョニング情報用セントラル・ストレージです。ここで、グループ、役割およびアプリケーション間の関係が保管されます

EPM System セキュリティを管理するシステム管理者を作成するために、管理者アカウント(デフォルト名 admin)が配置プロセス中にネイティブ・ディレクトリに作成されます。これは、EPM システムの最も強力なアカウントです。このアカウントのユーザー名およびパスワードは Foundation Services の配置中に設定されます。

ディレクトリ・マネージャは Shared Services Console を使用して、ネイティブ・ディレクトリにアクセスして管理します。[第5章「ネイティブ・ディレクトリの管理」](#)を参照してください。

ユーザー・ディレクトリ

ユーザー・ディレクトリとは、EPM System コンポーネントと互換性のある企業ユーザーおよび ID 管理システムを指します。

EPM System コンポーネントは、LDAP ベースのユーザー・ディレクトリ、およびリレーショナル・データベースを含む、いくつかのユーザー・ディレクトリでサポートされます。このドキュメントでは、ネイティブ・ディレクトリ以外のユーザー・ディレクトリを外部ユーザー・ディレクトリと呼びます。外部ユーザー・ディレクトリの管理を許可されている管理者のみです。

プロビジョニング(役割ベースの認証)

EPM System セキュリティでは、役割のコンセプトを使用してアプリケーションへのユーザー・アクセスが判別されます。役割とは、EPM System コンポーネント内の機能へのユーザー・アクセスを判別する権限です。一部の EPM System コンポーネントは、レポートおよびメンバーなどのアーティファクトへのユーザー・ア

セスをさらに詳細に制限するために、オブジェクトレベルの ACL が使用されま
す。

各 EPM System コンポーネントでは、様々な業務上の必要に対して調整された数個
のデフォルトの役割が提供されます。EPM System コンポーネントに属するアプリ
ケーションはこの役割を継承します。Shared Services に登録されたアプリケーション
からの事前定義済役割は、Shared Services Console に表示されます。

プロビジョニングを促進するために、特定の要件に合うように、デフォルトの役
割を集約する、カスタム・ネイティブ・ディレクトリの役割を作成できます。EPM
System アプリケーションに属する役割およびオブジェクト ACL をユーザーおよび
グループに付与するプロセスをプロビジョニングと呼びます。

ネイティブ・ディレクトリおよび構成済ユーザー・ディレクトリは、プロビジョ
ニング用のユーザーとグループ情報のソースです。

ユーザーが認証された後、ユーザーがアクセスしようとした EPM System コンポー
ネントによってユーザーのグループが判別されます。次に、ユーザーのプロビジョ
ニング・データを取得して、ユーザーに適用できる EPM System アプリケーション
の役割が判別されます。追加のデータまたはオブジェクトのアクセス・セキュリ
ティは、アプリケーション内で定義されるより詳細な権限を使用して処理される
場合があります。

EPM System 製品の役割ベースのプロビジョニングでは、これらのコンセプトが使
用されます。

役割

役割は、EPM System コンポーネントの機能を使用するための認証を定義するコン
ストラクトです。これは、通常アプリケーションの特定のリソースまたはオブジェ
クトのアクセス権を指定するアクセス制御リストとは異なります。

EPM System アプリケーション・リソースへのアクセスは制限されています。アク
セスを提供する役割がユーザー、またはユーザーが属するグループに割り当てら
れてからのみ、ユーザーはこれらのリソースにアクセスできます。

役割に基づいたアクセス制限では、機能の管理者は、アプリケーション・アクセ
スを制御および管理できます。付録 A 「EPM System 役割」を参照してください。

グローバルな役割

グローバルな役割、つまり複数のコンポーネントに及ぶ Shared Services の役割に
より、ユーザーは複数の製品間で特定のタスクを実行できます。Shared Services で
管理されるこの役割は削除できません。グローバルな役割のリストについては、
71 ページの「Foundation Services 役割」を参照してください。

事前定義済役割

事前定義済役割は、EPM System コンポーネントに組み込まれた役割であり、削除
できません。EPM System コンポーネントの各アプリケーション・インスタンス
は、製品のすべての事前定義済役割を継承します。各アプリケーションのこれら
の役割は、アプリケーションの作成および登録時に Shared Services に登録されま

す。事前定義済役割のリストについては、付録 A 「EPM System 役割」を参照してください。

集約役割

カスタム役割という名でも知られる集約役割では、複数の事前定義済アプリケーション役割が集約されます。集約役割には、他の集約役割を含めることができます。たとえば、Oracle Hyperion Planning のアプリケーションのプロビジョニング・マネージャは、そのアプリケーションのプランナと表示ユーザーの役割を組み合わせた集約役割を作成できます。役割を集約することにより、複数の細かい役割を持つアプリケーションの管理を簡略化できます。グローバル Shared Services の役割は、集約役割に含めることができます。複数のアプリケーションまたは EPM System コンポーネントに及ぶ集約役割は作成できません。

ユーザー

ユーザー・ディレクトリ(ネイティブ・ディレクトリおよび社内ユーザー・ディレクトリ)は、EPM System コンポーネントにアクセスできるユーザーのソースです。認証および承認プロセスでユーザー情報が使用されます。

ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーを作成して管理できるのは、Shared Services Console からのみです。すべての構成済ユーザー・ディレクトリからのユーザーは、Shared Services Console から確認できます。ユーザーは、Shared Services に登録された EPM System アプリケーションでアクセス権を許可するように個別にプロビジョニングできますが、個別ユーザーへのプロビジョニングはお勧めしません。

デフォルトの EPM System 管理者

管理者アカウント(デフォルト名 admin)が配置プロセス中にネイティブ・ディレクトリに作成されます。これは最も強力な EPM System アカウントで、EPM System セキュリティおよび環境の管理の責任を負う情報テクノロジーの専門家であるシステム管理者の設定にのみ使用される必要があります。

システム管理者

システム管理者(通常は、企業の情報テクノロジーの専門家)は、EPM System のセキュアな環境の設定と維持を担当します。

機能の管理者

機能の管理者は、EPM System の専門家である企業ユーザーです。通常、このユーザーは外部ユーザー・ディレクトリとして Shared Services に構成されている企業ディレクトリで定義されます。

システム管理者は、他の機能の管理者の作成、委任された管理者の設定、アプリケーションやアーティファクトの作成およびプロビジョニングなどの EPM System 管理タスクを実行する、EPM System 機能の管理者を作成します。

グループ

グループは、ユーザーまたは他のグループのコンテナです。Shared Services Console からネイティブ・ディレクトリ・グループを作成して、管理できます。構成済ユーザー・ディレクトリのグループおよびユーザーをネイティブ・ディレクトリ・グループのメンバーとして割り当てることができます。これらのグループをプロビジョニングして、Shared Services に登録された EPM System 製品の権限を許可できます。

3

アプリケーション・グループ およびアプリケーションでの 作業

この章の内容

概要	19
アプリケーション・グループの使用	19
アプリケーションの管理	22
アプリケーションの参照	25

概要

アプリケーション・グループおよびアプリケーションは、重要な EPM System の概念です。アプリケーションは、Shared Services に登録されている EPM System コンポーネントの1つのインスタンスへの参照です。プロビジョニング・アクティビティは、アプリケーションに対して実行されます。通常、アプリケーションはアプリケーション・グループにグループ分けされます。

アプリケーション・グループの使用

通常、配置済アプリケーション・インスタンスは、EPM System によって、選択した既存のアプリケーション・グループか、デフォルト・アプリケーション・グループ内に置かれます。

アプリケーション・グループは EPM System アプリケーションのコンテナです。たとえば、アプリケーション・グループに、Oracle Hyperion Planning アプリケーションと Oracle Hyperion Reporting and Analysis アプリケーションが含まれるとします。アプリケーションが属することのできるアプリケーション・グループの数は1つですが、アプリケーション・グループには複数のアプリケーションを含められます。

通常、アプリケーションは、EPM System コンポーネントによって、固有のアプリケーション・グループ内に置かれます。EPM System コンポーネントによって独自のアプリケーション・グループが作成されない場合、アプリケーションを登録しているユーザーは、アプリケーション・グループ(たとえば、デフォルト・アプリケーション・グループ)を選択し、アプリケーションを整理できます。Shared Services に登録されているが、アプリケーション・グループに追加されていないアプリケーションは、ビュー・ペインの「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードの下に一覧表示されます。プロビジョニング・マネージャはユーザーおよびグループを「デフォルト・アプリケーション・グループ」ノードにリストされているアプリケーションからの役割でプロビジョニングできます。

アプリケーション・グループの管理タスクを詳しく解説するトピック:

- 20 ページの「アプリケーション・グループの作成」
- 21 ページの「アプリケーション・グループ・プロパティの変更」
- 21 ページの「アプリケーション・グループの削除」

注： アプリケーション・グループを作成および管理するには、機能の管理者または LCM 管理者である必要があります。機能の管理者はすべての登録済アプリケーションを操作できます。プロジェクト・マネージャは、自分がプロビジョニング・マネージャで担当するアプリケーションのみ表示できます。

アプリケーション・グループの作成

アプリケーション・グループの作成中、新規アプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てることもできます。

▶ アプリケーション・グループを作成するには:

1 機能の管理者として Shared Services Console にアクセスします。

9 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。

2 ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「新規アプリケーション・グループ」を選択します。


3 「名前」に一意的アプリケーション・グループ名を入力し、「説明」にはオプションの説明を入力します。


アプリケーション・グループ名では、大文字と小文字が区別されます。たとえば、Test_1、TEst_1 および test_1 はそれぞれ一意的グループ名です。

4 このアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てるには:

1. 「アプリケーション・グループのアプリケーションのリスト」から、割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを選択します。

2. 「リストの更新」をクリックします。使用可能なアプリケーションのリストに、アプリケーション・グループに割り当て可能なアプリケーションが表示されます。

3. 「使用可能なアプリケーション」でアプリケーション・グループに割り当てるアプリケーションを選択し、をクリックします。

4. 割り当てられたアプリケーションを除去するには、「割り当てられたアプリケーション」から除去するアプリケーションを選択し、をクリックします。

5 「終了」をクリックします。

6 「追加作成」をクリックし、別のアプリケーション・グループを作成するか、「OK」をクリックしてステータス画面を閉じます。

アプリケーション・グループ・プロパティの変更

プロパティおよびアプリケーションの割当てなどアプリケーション・グループの設定はすべて変更できます。

注： 機能の管理者はアプリケーションを別のアプリケーション・グループから移動することで、アプリケーション・グループに追加することもできます。
22 ページの「[アプリケーションの移動](#)」を参照してください。

▶ アプリケーション・グループを変更するには:

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、「開く」を選択します。
- 3 必要に応じてアプリケーション・グループ・プロパティを変更します。アプリケーションの割当てと除去の詳細は、20 ページの[手順 4](#)を参照してください。

注： グループから削除するアプリケーションは、自動的にデフォルト・アプリケーション・グループに再度割り当てられます。

- 4 「保存」をクリックします。

アプリケーション・グループの削除

アプリケーション・グループを除去すると、アプリケーションとアプリケーション・グループとの関連付けが除去され、アプリケーション・グループが削除されますが、アプリケーションからプロビジョニング割当ては削除されません。

次のアプリケーション・グループは削除できません。

- デフォルト・アプリケーション・グループ
- Foundation
- ファイル・システム

▶ アプリケーション・グループを削除するには:

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインでアプリケーション・グループを右クリックし、「削除」を選択します。

注： アプリケーション・グループに割り当てられているアプリケーションは自動的にデフォルト・アプリケーション・グループに再度割り当てられます。

- 3 「はい」をクリックします。
- 4 「OK」をクリックします。

アプリケーションの管理

Shared Services は、登録された EPM System アプリケーションを追跡します。

一般的には、アプリケーション・インスタンスは、配置プロセス中に Shared Services に登録されます。

一部のアプリケーションの登録では、アプリケーション・グループが作成され、そのアプリケーション・グループにアプリケーションを割り当てます。登録でアプリケーション・グループが作成されない場合は、アプリケーションがデフォルト・アプリケーション・グループの下に一覧表示されます。プロビジョニング・マネージャは、これらのアプリケーションをプロビジョニングできます。機能の管理者がデフォルト・アプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動する場合、Shared Services はプロビジョニング情報を保持します。

アプリケーション管理タスクについてのトピック

- [22 ページの「アプリケーションの移動」](#)
- [23 ページの「アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー」](#)
- [24 ページの「アプリケーションの削除」](#)
- [24 ページの「Essbase アプリケーション・アーティファクトのプロビジョニング」](#)

アプリケーションの移動

機能の管理者はプロビジョニング・データを失うことなく、1つのアプリケーション・グループから別のアプリケーション・グループにアプリケーションを移動できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを移動すると、アプリケーションとアプリケーション・グループ間の関連付けが除去されます。

注： Shared Services と配置メタデータのアプリケーションは、Foundation アプリケーション・グループから移動できません。

▶ アプリケーションを移動するには:

- 1 機能の管理者として Shared Services Console にアクセスします。
[9 ページの「Shared Services Console の起動」](#) を参照してください。
- 2 移動するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
- 3 アプリケーションを右クリックし、「移動」を選択します。
- 4 「移動」でアプリケーションの移動先のアプリケーション・グループを選択します。
- 5 「保存」をクリックします。

アプリケーション間のプロビジョニング情報のコピー

機能の管理者はプロビジョニング情報を EPM System アプリケーション・インスタンス間(ある Planning アプリケーションから別のアプリケーションなど)でコピーできます。プロビジョニング・マネージャがプロビジョニング情報をコピーすると、すべてのユーザー、グループ、および役割の情報がターゲット・アプリケーションにコピーされます。アーティファクト・プロビジョニング情報はアプリケーション間でコピーできません。

▶ アプリケーション間でプロビジョニング情報をコピーするには:

- 1 プロビジョニング・マネージャまたは機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。

9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 ビュー・ペインで、プロビジョニング情報のコピー元のアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
- 3 プロビジョニング情報をコピーするアプリケーションを右クリックして、「プロビジョニングのコピー」を選択します。

「プロビジョニングのコピー」が開きます。このタブには、プロビジョニング情報をコピーできるターゲット・アプリケーションが一覧表示されます。

- 4 目的のアプリケーションを選択します。
- 5 「保存」をクリックします。

複数のアプリケーションの削除

機能の管理者がアプリケーションを削除すると、プロビジョニング情報も削除されます。

▶ アプリケーションを削除するには、次の手順に従います。

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。

9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 ビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を右クリックし、「削除」を選択します。
- 3 削除するアプリケーションを選択します。アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションを削除するには、そのアプリケーション・グループを選択します。

注: この画面でアプリケーション・グループを削除できません。21 ページの「[アプリケーション・グループの削除](#)」を参照してください。

- 4 「削除」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

アプリケーションの削除

機能の管理者はアプリケーション・グループからアプリケーションを削除できます。アプリケーション・グループからアプリケーションを削除する場合、そのアプリケーションのプロビジョニング情報はすべて除去されます。

▶ アプリケーションを削除するには:

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、削除するアプリケーションを含むアプリケーション・グループのノードを展開します。
- 3 アプリケーションを右クリックし、「削除」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

Essbase アプリケーション・アーティファクトのプロビジョニング

EPM System では、アプリケーションおよびデータのセキュリティを確実にするためにアプリケーションおよびアーティファクトレベルのプロビジョニングが使用されます。各 EPM System アプリケーションへのアクセスは、ユーザーおよびグループにアプリケーションの役割をプロビジョニングすることで制限されます。通常、プロビジョニング・マネージャは **Shared Services Console** を使用してユーザーおよびグループに EPM System アプリケーションに対するプロビジョニングを行います。

一部の EPM System アプリケーションは、独自のアーティファクト(アプリケーションのみに属するレポートおよび計算スクリプトなど)を作成します。ほとんどの場合、アプリケーションのアーティファクトへのアクセスは、アプリケーション・ユーザーおよびグループにプロビジョニングすることで制御できます。たとえば、**Oracle Essbase Administration Services** コンソールまたは **MaxL** を使用して **Oracle Essbase** のフィルタおよび計算スクリプトを作成します。Essbase アプリケーションのプロビジョニング・マネージャは、**Shared Services Console** を使用して、これらのフィルタおよび計算スクリプトをプロビジョニングできます。

プロビジョニング・マネージャはプロビジョニング・マネージャとして定義されたアプリケーションからの役割でグループをプロビジョニングできます。一般的には、アプリケーションの所有者(**Foundation Services** でアプリケーションを作成および登録したユーザー)にはアプリケーションのプロビジョニング・マネージャの役割が自動的に付与されます。

この手順を開始する前に、必要なサーバーとアプリケーションが実行されていることを確認してください。

▶ アプリケーション固有のアクセス権を割り当てるには:

- 1 プロビジョニング・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

- 2 ビュー・ペインで、アクセス権を割り当てるアプリケーションを含むアプリケーション・グループを展開します。
- 3 アプリケーションを右クリックし、「アクセス権の割当て」を選択します。このオプションは、アクセス権を設定可能なアプリケーションにのみ使用可能です。

注： アプリケーションが実行されていない場合は、アプリケーションを選択するとエラー・メッセージが表示されます。アプリケーションにアクセスするには、アプリケーションを起動し、「表示」、「リフレッシュ」の順にクリックして、ビュー・ペインをリフレッシュします。

- 4 アクセス権を割り当てます。製品の役割のリストは、[付録 A 「EPM System 役割」](#)を参照してください。

アプリケーションの参照

Shared Services Console のライフサイクル管理インタフェースにより、アプリケーション・アーティファクトの表示、検索、エクスポート、およびインポートが可能です。アーティファクトは各種カテゴリにソートされているため、整然と表示されます。Oracle Enterprise Performance Management System Lifecycle Management Guide を参照してください。

4

委任されたユーザー管理

この章の内容

委任されたユーザー管理について	27
管理者の階層	27
委任されたユーザー管理モードを使用可能にする	28
委任された管理者の作成	29

委任されたユーザー管理について

委任されたユーザー管理では、EPM System 製品向けの管理者の階層を作成できます。この機能では、Shared Services 管理者は、責任のあるユーザーとグループを管理するための制限されたアクセスを許可される他の管理者に、ユーザーとグループを管理する責任を委任できます。

Shared Services 管理者の役割を持つユーザーのみが EPM System 製品のすべてのユーザーとグループを表示できます。委任された管理者は、責任のあるユーザーとグループのみを表示および管理できます。また、委任された管理者は、割り当てられた役割によって許可された管理タスクのみを実行できます。

管理者の階層

システム管理者、機能の管理者および委任された管理者の 3 層の管理者は、委任された管理モードに存在します。

システム管理者

システム管理者は EPM System セキュリティおよびシステム環境の管理の責任を負う情報テクノロジーの専門家です。

機能の管理者

企業ユーザーに Foundation Services の LCM 管理者の役割および配置された各 EPM System コンポーネントの管理者の役割をプロビジョニングすることによって、システム管理者は機能の管理者を作成します。この機能の管理者はアプリケーション間でプロビジョニング・アクティビティをすべて実行できます。

機能の管理者は、EPM System 内で、アクセスをより制限された他の機能の管理者を作成できます。たとえば、Planning アプリケーション PlanApp1 を管理する場

合、機能の管理者はユーザーに Foundation Services の管理者の役割と Planning アプリケーション PlanApp1 の管理者の役割をプロビジョニングできます。

委任された管理者

委任された管理者は、EPM System コンポーネントへの管理者レベルのアクセスは制限されています。委任された管理者は、管理者アクセスを許可されているユーザーとグループにのみアクセスできます。これで、複数の管理者全体でユーザーとグループ管理のタスクを分割できます。

EPM System コンポーネントに対して委任された管理者が実行できるアクションの範囲は、機能の管理者がプロビジョニングによって許可したアクセス権によってコントロールされます。たとえば、委任された管理者が Shared Services でディレクトリ・マネージャのグローバルの役割を許可され、ユーザーがネイティブ・ディレクトリでユーザーとグループを作成できると仮定してください。役割を追加しない場合、この委任された管理者は、他の管理者が作成したユーザーとグループのリストを表示できません。作成したユーザーを表示するには、委任された管理者に役割の追加が必要です。

委任されたユーザー管理モードを使用可能にする

デフォルトの Shared Services の配置では、委任された管理はサポートされていません。委任された管理者を作成する前に Shared Services の委任されたユーザー管理モードを使用可能にする必要があります。委任されたユーザー管理モードに切り替えると、追加の画面およびメニュー・オプションが使用可能になります。

委任された管理モードでは、委任された管理者に割り当てられた役割の範囲は、委任されたリストのユーザーとグループに制限されています。デフォルト・モードに戻すと、その制限が解除され、その役割のオリジナルの範囲が回復します。たとえば、Essbase プロビジョニング・マネージャの役割を割り当てられているユーザー del_admin1 は、Esb_group1 および Esb_group2 の委任された管理者であると仮定してください。デフォルト・モードに戻すと、del_admin1 がすべてのユーザーとグループに対して Essbase プロビジョニング・マネージャになります。

▶ 委任されたユーザー管理モードを使用可能にするには:

- 1 機能の管理者として Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「管理」から、「ユーザー・ディレクトリの構成」を選択します。
- 3 「セキュリティ・オプション」、「詳細オプションの表示」の順に選択します。
- 4 「委任されたユーザー管理モードを使用可能にする」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。
- 7 Foundation Services とその他の EPM System コンポーネントを再起動します。

委任された管理者の作成

- [29 ページの「プランニング・ステップ」](#)
- [29 ページの「委任された管理者のプロビジョニング」](#)
- [30 ページの「委任リストの作成」](#)
- [34 ページの「委任されたレポートの表示」](#)

プランニング・ステップ

- [29 ページの「委任された管理者のユーザー・アカウント」](#)
- [29 ページの「委任プランの作成」](#)

委任された管理者のユーザー・アカウント

機能の管理者は、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリのユーザー・アカウントから委任された管理者を作成します。プロビジョニングとは異なり、委任された管理者の機能はグループには割り当てることができません。Shared Services 管理の委任プロセスを開始する前に、委任された管理者が、構成されたユーザー・ディレクトリでユーザーとして作成されることを確認します。

委任プランの作成

委任プランでは、委任された管理者が実行を許可される EPM System コンポーネントとタスクを効果的に管理するために必要な委任された管理者が識別される必要があります。プランではこれらのユーザー、グループ、および役割が識別される必要があります。

- 各委任された管理者が管理する必要があるユーザーとグループ。このリストは、委任リストを作成中に使用できます。[30 ページの「委任リストの作成」](#)を参照してください。
- 各委任管理者が許可される必要がある Shared Services および EPM System 製品の役割

委任された管理者のプロビジョニング

機能の管理者は実施する必要があるアクティビティを定義する委任プランに基づいて役割を付与することにより、委任された管理者にプロビジョニングします。[71 ページの「Foundation Services 役割」](#)を参照してください。

委任された管理者は、EPM System 製品から、たとえば Planning からのプロビジョニング・マネージャから役割を許可され、委任された管理者が EPM System 製品の管理タスクを実行できます。

委任リストの作成

委任リストでは、委任された管理者が管理できるユーザーとグループが識別されます。各リストは、1つ以上の委任された管理者に割り当てられます。委任された管理者は、次のタスクを実行できます。

- 委任リストを通して、管理者に割り当てられたユーザーとグループのみを表示します。その他のユーザーとグループはすべて、リストから非表示になったままです。
- 管理する他のユーザーの委任リストを作成します。
- 委任リストに含まれるユーザーとグループのみを検索して取得します。


注： Shared Services では、現在のユーザーが委任リストを管理するために割り当てられている場合のみ、「委任リスト」のノードが表示されます。

委任された管理者が作成するユーザーとグループは、これらを作成した管理者に自動的に割り当てられません。機能の管理者は、委任された管理者がこれらのユーザーとグループにアクセスする前に、これらのユーザーとグループを委任リストに追加する必要があります。ただし、委任された管理者は、作成する委任リストにこれらのユーザーとグループを割り当てることができます。

▶ 委任リストを作成するには:

- 1 Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」で、「委任リスト」を右クリックし、「新規委任」を選択します。
- 3 「全般」に、一意の委任されたリンク名とオプションの説明を入力します。
- 4 **オプション:** このリストに割り当てられた委任された管理者が管理できるグループを追加するには、「次へ」をクリックします。


「グループ・メンバー」が表示されます。

1. 「ディレクトリ」で、グループを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているグループのみ検索できます。
2. 検索するグループ属性(グループ名または説明)をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。
3. 「検索」をクリックします。
4. 「使用可能なグループ」から、グループを選択します。
5.  をクリックします。

注： Shared Services は、Oracle および SQL Server データベースの役割をユーザー・ディレクトリのグループと同等のものとみなします。

Oracle データベースの役割は、階層にすることができます。

SQL Server データベースの役割はネストできません。

6. オプション: 「割り当てられたグループ」からグループを選択し、をクリックしてグループの割当てを解除します。

5 オプション: 「次へ」をクリックして、このリストの委任された管理者が管理できるユーザーを追加します。


「ユーザー・メンバー」が表示されます。

1. 「ディレクトリ」で、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。委任された管理者である場合は、検索では、自分に割り当てられているユーザーのみがリストされます。


2. 検索するユーザー属性をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。

3. 「検索」をクリックします。

4. 「使用可能なユーザー」から、ユーザーを選択します。

5. をクリックします。

選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. オプション: 「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択し、をクリックしてユーザーの割当てを解除します。

注: リストの委任された管理者が、ユーザーとして自動的に追加されます。

6 オプション: 「次へ」をクリックして、このリスト用の委任された管理者を割り当てます。


「管理者」が表示されます。

1. 「ディレクトリ」で、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。


2. 検索するユーザー属性をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。

3. 「検索」をクリックします。

4. 「使用可能なユーザー」から、ユーザーを選択します。

5. をクリックします。

選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. オプション: 「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択し、をクリックしてユーザーの割当てを解除します。

注: リストを作成するユーザーが、リストの委任された管理者として自動的に追加されます。

7 「終了」をクリックします。

8 「追加作成」をクリックして別のリストを作成するか、「OK」をクリックして「委任リストの作成」画面を閉じます。

委任リストの変更

委任された管理者は、自分に割り当てられているリストのみ変更できます。機能の管理者はすべての委任リストを変更できます。

▶ 委任リストを変更するには:

1 **Shared Services Console** にアクセスします。9 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。

2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」ノードから「委任リスト」を選択します。

3 変更する委任リストを検索します。

11 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。

検索条件に一致する委任リストが「参照」タブに一覧表示されます。

4 委任リストを右クリックして、「プロパティ」を選択します。

5 **オプション:** 「全般」で、リスト名と説明を変更します。


6 **オプション:** グループの割当てを変更するには、「グループ・メンバー」をクリックします。

1. 「ディレクトリ」で、グループを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。委任された管理者である場合は、自分に割り当てられているグループのみ検索できます。

2. 検索するグループ属性(グループ名または説明)をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。

3. 「検索」をクリックします。


4. 「使用可能なグループ」から、グループを選択します。

5.  をクリックします。

注: Shared Services は、Oracle および SQL Server データベースの役割をユーザー・ディレクトリのグループと同等のものとみなします。

Oracle データベースの役割は、階層にすることができます。


SQL Server データベースの役割はネストできません。

6. **オプション:** 「割り当てられたグループ」からグループを選択し、 をクリックしてグループの割当てを解除します。


7 **オプション:** ユーザーの割当てを変更するには、「ユーザー・メンバー」をクリックします。

1. 「ディレクトリ」で、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。委任された管理者である場合は、検索では、自分に割り当てられているユーザーのみがリストされます。


2. 検索するユーザー属性をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。

3. 「検索」をクリックします。
4. 「使用可能なユーザー」から、ユーザーを選択します。
5. をクリックします。


選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. オプション: 「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択し、をクリックしてユーザーの割当てを解除します。

8 オプション: 委任された管理者の割当てを変更するには、「管理者」をクリックします。

1. 「ディレクトリ」で、ユーザーを表示するユーザー・ディレクトリを選択します。
2. 検索するユーザー属性をドロップダウン・リストから選択し、検索フィルタを入力します。
3. 「検索」をクリックします。
4. 「使用可能なユーザー」から、ユーザーを選択します。
5. をクリックします。

選択したユーザーが「割り当てられたユーザー」に一覧表示されます。

6. オプション: 「割り当てられたユーザー」からユーザーを選択し、をクリックしてユーザーの割当てを解除します。

9 「OK」をクリックします。

10 「OK」をクリックします。

委任リストの削除

▶ 委任リストを削除するには:

- 1 **Shared Services Console** にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」ノードから「委任リスト」を選択します。
- 3 変更する委任リストを検索します。
11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。

検索条件に一致する委任リストが「参照」タブに一覧表示されます。

- 4 委任リストを右クリックして、「削除」を選択します。
- 5 「はい」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックします。

委任されたレポートの表示

委任されたレポートには、選択された委任リストに割り当てられたユーザーとグループ、およびリストが割り当てられた委任された管理者に関する情報が含まれます。

機能の管理者は、すべての委任リストの委任されたレポートを生成および表示できます。委任された管理者は、作成した委任リスト、および管理者に割り当てられた委任リスト上のレポートを生成できます。

▶ 委任されたレポートを表示するには:

- 1 **Shared Services Console** にアクセスします。9 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」で、「委任リスト」を右クリックし、「委任されたレポートの表示」を選択します。
- 3 「委任リスト名」で、レポートが生成されるリスト名を入力します。パターン検索用にワイルドカードとして*を使用します。
- 4 「管理者」で、指定リストの割当てがレポートされる委任された管理者のユーザー ID を入力します。パターン検索にはワイルドカードとして*を使用します。
- 5 「作成」をクリックします。
- 6 「OK」をクリックしてレポートを閉じるか、または「印刷プレビュー」をクリックしてレポートをプレビューします。

レポートをプレビューする場合、次の手順に従います:

1. 「印刷」をクリックしてレポートを印刷します。
2. 「閉じる」をクリックしてレポートの表示ウィンドウを閉じます。

5

ネイティブ・ディレクトリの管理

この章の内容

ネイティブ・ディレクトリ情報	35
デフォルトのネイティブ・ディレクトリ・ユーザーおよびグループ.....	35
ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理	36
ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理	41
役割の管理.....	46
ネイティブ・ディレクトリのバックアップ	49

ネイティブ・ディレクトリ情報

ネイティブ・ディレクトリは、ユーザー・プロビジョニング・データおよび製品登録データを格納するリレーショナル・データベースです。

Shared Services Console は、ネイティブ・ディレクトリの管理インタフェースです。Shared Services Console には、ネイティブ・ディレクトリを含む、構成済ユーザー・ディレクトリから取得された EPM System のユーザーとグループのリストが表示されます。これらのユーザーおよびグループは、プロビジョニングで使用されます。

デフォルトのネイティブ・ディレクトリ・ユーザーおよびグループ

ネイティブ・ディレクトリには、デフォルトで、デフォルトの管理者アカウント(推奨されるデフォルトのユーザー名は admin)が含まれています。このアカウントは EPM System セキュリティおよびシステム環境の維持の責任を負うシステム管理者の作成に使用されます。

システム管理者はすべてのネイティブ・ディレクトリおよび Shared Services 管理タスクを実行する機能の管理者を作成します。

EPM System のすべてのユーザー(ネイティブ・ディレクトリまたは外部ユーザー・ディレクトリで定義されたかどうかに関係なく)は、WORLD グループ(ネイティブ・ディレクトリの唯一のデフォルト・グループ)に属しています。WORLD は論理グループです。Shared Services のすべてのユーザーは、このグループに割り当てられたすべての役割を継承します。ユーザーは、ユーザーに直接割り当てられたすべての権限およびユーザーのグループ(WORLD グループを含む)に割り当てられたすべての権限を合せて取得します。

Shared Services が委任モードで配置されている場合、WORLD グループには、グループおよびユーザーが含まれます。ユーザーの委任リストに WORLD グループが含まれている場合、ユーザーは、検索時にすべてのユーザーおよびグループを取得できます。

ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーの管理

機能の管理者またはディレクトリ・マネージャは、次のタスクの一部を実行して、ネイティブ・ディレクトリのユーザー・アカウントを管理できます。

- [36 ページの「ユーザーの作成」](#)
- [37 ページの「ユーザー・アカウントの表示および変更」](#)
- [39 ページの「ユーザー・アカウントの非アクティブ化」](#)
- [40 ページの「ユーザー・アカウントの削除」](#)
- [54 ページの「グループのプロビジョニング」](#)
- [54 ページの「グループのプロビジョニング解除」](#)
- [58 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)

注： 外部ユーザー・ディレクトリのユーザーは、Shared Services Console から管理できません。

ユーザーの作成

▶ ユーザーを作成するには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。[9 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。
- 2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」ノードで、「ユーザー」を右クリックし、「新規ユーザー」を選択します。
- 3 「ユーザーの作成」に、必要な情報を入力します。

表 1 「ユーザーの作成」画面


ラベル	説明
「ユーザー名」	組織の名前付けルールに従う一意のユーザー識別子(最大 256 文字)(例: jyoung などの名の先頭文字とそれに続く姓) ユーザー名には、任意の数値または文字の組合せを含むことができます。 同じユーザー名(スペースの数のみが異なる名前など)を作成できません。たとえば、ユーザー名 user 1 (user と 1 の間にスペースが 1 つある)と user 1 (user と 1 の間にスペースが 2 つある)は作成できません。
「パスワード」	パスワードは大文字と小文字を区別し、文字の任意の組合せを含むことができます。
「パスワードの確認」	パスワードを再入力します。

ラベル	説明
「名」	ユーザーの名(オプション)
「姓」	ユーザーの姓(オプション)
「説明」	ユーザーの説明(オプション)
「電子メール・アドレス」	ユーザーの電子メール・アドレス(オプション)。電子メール・サーバー・ドメインの拡張子(.com、.org、.gov など)は、4文字までにする必要があります。

4 オプション: ネイティブ・ディレクトリ・グループにユーザーを割り当てるには、「次へ」をクリックします。

- 「使用可能なグループ」リストの上にあるフィールドを使用して、グループを検索します。
 - ドロップダウン・リストから、「グループ名」を選択すると、グループ名に基づいて検索します。「説明」を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。
 - グループを取得するための条件を入力します。*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。
 - 「検索」をクリックします。
検索条件に一致するグループが、「使用可能なグループ」に表示されます。

- 「使用可能なグループ」から、グループを選択します。

- をクリックします。

選択したグループは、「割り当てられたグループ」リストに表示されます。

- オプション:** 別のグループを取得して割り当てるには、[手順 4.1](#) を繰り返します。

「割り当てられたグループ」の上にあるフィールドを使用すると、割り当てられたグループを検索し、削除するグループを識別できます。割り当てられたグループ内の検索の手順については、[手順 4.1](#) を参照してください。

「割り当てられたグループ」から、割り当てられたグループを削除するに

は、削除するグループを選択して、をクリックします。

- 「終了」をクリックします。

- 「追加作成」をクリックして別のユーザーを作成するか、「終了」をクリックして「ユーザーの作成」を閉じます。

ユーザー・アカウントの表示および変更

機能の管理者およびディレクトリ・マネージャは、EPM System の配置の際に作成したシステム管理者アカウントのユーザー名など、ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー・アカウントのプロパティを表示および変更できます。

管理者ではないネイティブ・ディレクトリ・ユーザーは、情報の表示はできますが、変更はできません。

▶ ユーザー情報を表示および変更するには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。9 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインの「ネイティブ・ディレクトリ」ノードから、「ユーザー」を選択します。
- 3 ユーザー・アカウントを検索します。11 ページの「**ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索**」を参照してください。
- 4 変更するユーザー・アカウントを右クリックし、「プロパティ」を選択します。

注: Shared Services が委任された管理モードで配置されている場合、「ユーザー・プロパティ」画面には、「委任リスト」が表示されます。

- 5 「全般」で、ユーザー・プロパティを変更します。

変更できるプロパティの説明については、表 1 を参照してください。

- 6 **オプション:** ネイティブ・ディレクトリ・グループとのユーザーの関連を変更します。

1. 「メンバー」をクリックします。

2. 「使用可能なグループ」の上にあるフィールドを使用して、グループを検索します。


1. ドロップダウン・リストから、「グループ名」を選択すると、グループ名に基づいて検索します。「説明」を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。

2. グループを取得するための条件を入力します。*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。

3. 「検索」をクリックします。

検索条件に一致するグループが、「使用可能なグループ」に表示されます。

3. 「使用可能なグループ」から、グループを選択します。

4.  をクリックします。

選択したグループは、「割り当てられたグループ」の下に表示されます。

5. **オプション:** 別のグループを取得して割り当てるには、手順 6.2 を繰り返します。

「割り当てられたグループ」の上にあるフィールドを使用すると、割り当てられたグループを検索し、削除するグループを識別できます。割り当てられたグループ内の検索の手順については、手順 6.2 を参照してください。

「割り当てられたグループ」から、割り当てられたグループを削除するに

は、削除するグループを選択して、 をクリックします。

- 7 **オプション:**「委任リスト」をクリックすると、ユーザーの委任リストの割当てが表示されます。
- 8 「終了」をクリックします。

ユーザー・アカウントの非アクティブ化

EPM System のアプリケーションに対するアクセス権が禁止されているネイティブ・ディレクトリ・ユーザー・アカウントを非アクティブにします。アカウントの非アクティブ化は、通常、Shared Services 管理者が再アクティブ化する予定がある場合に一時的に行われます。

- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、EPM System のアプリケーション (Shared Services Console を含む) のログオンには使用できません。
- 非アクティブ・アカウントのグループ関連は維持され、機能の管理者に見える状態で残ります。
- 非アクティブ・アカウントの役割関連は維持されます。
- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、製品固有のアクセス制御画面に表示されません。
- 非アクティブ・ユーザー・アカウントは、ネイティブ・ディレクトリから削除されません。

注: LCM 管理者の役割でプロビジョニングされているユーザーは、システム管理者など、他の管理者を非アクティブ化できます。

▶ ユーザー・アカウントを非アクティブにするには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 非アクティブにする「ネイティブ・ディレクトリ」・ユーザーを検索します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
- 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、「非アクティブにする」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

非アクティブ・ユーザー・アカウントのアクティブ化

非アクティブ・ネイティブ・ディレクトリ・ユーザー・アカウントをアクティブにすると、アカウントが非アクティブ化されるまでに存在した関連が元に戻ります。非アクティブ・ユーザー・アカウントがメンバーであったグループが削除された場合、削除されたグループから与えられた役割は元に戻りません。

注: 非アクティブ化されたシステム管理者および機能の管理者アカウントは、別の管理者によってのみアクティブ化できます。

▶ 非アクティブなユーザー・アカウントをアクティブにするには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 アクティブにする「ネイティブ・ディレクトリ」ユーザーを検索します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
- 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、「アクティブにする」を選択します。
- 4 「OK」をクリックします。

ユーザー・アカウントの削除

ユーザー・アカウントを除去すると、ネイティブ・ディレクトリ・グループとのユーザーの関連、ユーザーの役割の割当ておよびユーザー・アカウントがネイティブ・ディレクトリから削除されます。

注: システム管理者アカウント(デフォルトでは admin)は削除できません。

▶ ユーザー・アカウントを削除するには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 削除する「ネイティブ・ディレクトリ」ユーザーを検索します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
- 3 ユーザー・アカウントを右クリックし、「削除」を選択します。
- 4 「はい」をクリックします。
- 5 「OK」をクリックします。

ネイティブ・ディレクトリのユーザー・パスワードの変更

ネイティブ・ディレクトリのアカウントは、他の企業アプリケーションのサポートに使用されるユーザー・アカウントとは分離されているため、パスワードの変更は、EPM System 製品にのみ影響します。

▶ 現在のユーザーのネイティブ・ディレクトリのパスワードを変更するには、次の手順に従います。

- 1 EPM Workspace を起動します。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「ツール」、「パスワードの変更」の順に選択します。
- 3 「現在のパスワード」に、パスワードを入力します。
- 4 「新パスワード」と「パスワードの確認」に、新パスワードを入力します。
- 5 「保存」をクリックします。

ネイティブ・ディレクトリ・グループの管理

ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーは、共通の特性に基づいてグループ化できます。たとえば、ユーザーを機能に基づいてスタッフ、マネージャ、販売などのグループに分類したり、場所に基づいて Sales_West や Managers_HQ などのグループに分類できます。ユーザーは多数のグループに属することができます。

ネイティブ・ディレクトリ・グループは、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリの他のグループおよびユーザーを含むことができます。

ユーザーのグループ所属は、認可プロセスでは重要な考慮事項です。通常、個々のユーザー・アカウントではなくグループがプロビジョニングの円滑化に使用されます。

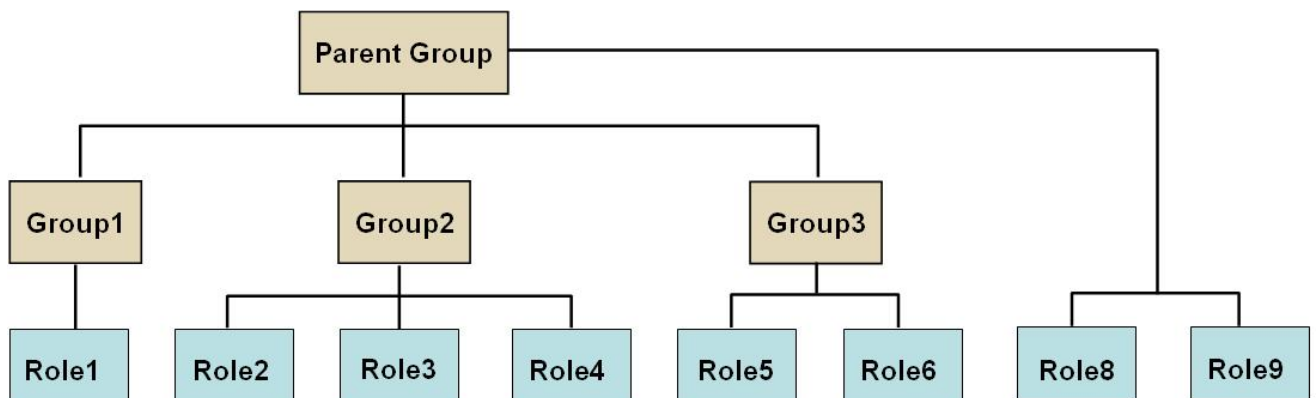
機能の管理者およびディレクトリ・マネージャが実行するタスク:

- [42 ページの「グループの作成」](#)
- [44 ページの「グループの変更」](#)
- [46 ページの「グループの削除」](#)
- [54 ページの「グループのプロビジョニング」](#)
- [54 ページの「グループのプロビジョニング解除」](#)
- [58 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)

注: 外部ユーザー・ディレクトリのグループは、Shared Services Console から管理できません。

ネストされたグループ

ネストされたグループは、他のグループ(親グループ)のメンバーであるグループです。ネストされたグループの使用によってプロビジョニングが容易になります。グループのメンバーは、親グループに割り当てられた役割を継承します。構成されている任意のユーザー・ディレクトリからグループを使用してネイティブ・ディレクトリにネストされたグループを作成できます。非常に複雑なネストされたネイティブ・ディレクトリ・グループの使用はお勧めしません。概念を図で示します:



各コンポーネント・グループ(Group2 など)は、コンポーネント・グループに直接割り当てられている役割に加えて、親グループに割り当てられているすべての役

割(図では Role8 と Role9)を継承します。たとえば、図の Group1 の役割割当ては、Role1、Role8、および Role9 です。親グループはメンバー・グループに割り当てられた役割を継承しません。

グループの作成

ネイティブ・ディレクトリのグループには、ネイティブ・ディレクトリを含め、Shared Services で構成されたユーザー・ディレクトリからのユーザーとグループを含めることができます。


外部ユーザー・ディレクトリのグループをネイティブ・ディレクトリ・グループに追加すると、Shared Services は、データベース内に参照を作成して関係を確立します。

▶ ネイティブ・ディレクトリ・グループを作成するには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。
9 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 ビュー・ペインで、「ネイティブ・ディレクトリ」を展開します。
- 3 「グループ」を右クリックし、「新規グループ」を選択します。
- 4 「名前」に、役割の名前を入力します(最大 256 文字)。
グループ名では大文字と小文字は区別されません。
- 5 オプション: グループの説明を入力します。
- 6 次のいずれかのアクションを行います:
 - 「終了」をクリックすると、グループまたはユーザーを追加せずにグループが作成され、手順 11 に進みます。
 - 「次へ」をクリックすると、ネストされたグループが作成されるか、グループにユーザーが割り当てられます。
- 7 ネストされたグループを作成します。この手順をスキップするには、「次へ」をクリックします。
 1. 「使用可能なグループ」の上にあるフィールドを使用して、グループ・メンバーとして追加するグループを検索します。
 1. 「ディレクトリ」で、子グループの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。「すべて」を選択すると、すべての構成済ユーザー・ディレクトリでグループが検索されます。
 2. ドロップダウン・リストから、「グループ名」を選択すると、グループ名に基づいて検索します。「説明」を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。
 3. グループを取得するための条件を入力します。*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。
 4. 「検索」をクリックします。

検索条件に一致するグループが、「使用可能なグループ」に表示されます。

2. 「使用可能なグループ」から、新しいグループのメンバー・グループを選択します。


3. をクリックします。

選択したグループは、「割り当てられたグループ」リストに表示されます。

4. **オプション:**別のグループを取得して割り当てるには、[手順 7.1](#) から [手順 7.3](#) を繰り返します。

「割り当てられたグループ」の上にあるフィールドを使用すると、割り当てられたグループを検索し、削除するグループを識別できます。割り当てられたグループ内の検索の手順については、[手順 7.1](#) から [手順 7.3](#) を参照してください。

「割り当てられたグループ」から、割り当てられたグループを削除するに

は、削除するグループを選択して、をクリックします。

8 次のいずれかのアクションを行います:

- 「終了」をクリックすると、ユーザーを追加せずにグループが作成され、[手順 11](#) に進みます。
- 「次へ」をクリックすると、グループにユーザーが割り当てられます。

9 ユーザーをグループに割り当てるには:

1. 「使用可能なユーザー」リストの上にあるフィールドを使用して、グループ・メンバーとして追加するユーザーを検索します。

1. 「ディレクトリ」で、ユーザー・メンバーを追加するユーザー・ディレクトリを選択します。「すべて」を選択すると、すべての構成済ユーザー・ディレクトリでユーザーが検索されます。


2. ドロップダウン・リストから、「ユーザー名」を選択すると、ユーザー名に基づいて検索します。「説明」を選択すると、ユーザーの説明に基づいて検索されます。

3. ユーザーを取得するための条件を入力します。*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのユーザーが取得されます。

4. 「検索」をクリックします。


検索条件に一致するユーザーが、「使用可能なユーザー」に表示されます。

2. 「使用可能なユーザー」から、グループに追加するユーザーを選択します。

3. をクリックして、選択したユーザー・アカウントを「割り当てられたユーザー」に移動します。

4. **オプション:**別のユーザーを取得して割り当てるには、[手順 9.1](#) から [手順 9.4](#) を繰り返します。

「割り当てられたユーザー」の上にあるフィールドを使用すると、割り当てられたユーザーを検索し、削除するユーザーを識別できます。

「割り当てられたユーザー」から、割り当てられたユーザーを削除するには、削除するユーザーを選択して、をクリックします。

10 「終了」をクリックします。

11 「追加作成」を選択して別のグループを作成するか、または「終了」します。

グループの変更

WORLD グループ以外のすべてのネイティブ・ディレクトリ・グループのプロパティを変更できます。ネストされたグループからサブグループ除去すると、サブグループの役割継承が更新されます。同様に、グループからユーザーを除去すると、ユーザーの役割継承が更新されます。

▶ グループを変更するには、次の手順に従います。

1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。

9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 グループを検索します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。


3 グループを右クリックして、「プロパティ」を選択します。

注： Shared Services が委任された管理モードで配置されている場合、グループ・プロパティ画面には、「委任リスト」タブが表示されます。

4 「全般」タブで名前と説明を編集して、グループの一般的なプロパティを変更します。

5 「グループ・メンバー」タブを開き、[手順 5.1](#) または [手順 5.2](#)、あるいはその両方のアクションを実行してグループの割当てを変更します：


1. グループにグループを追加するには：

- 「ディレクトリ」で、ネストしたグループの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。「すべて」を選択すると、すべての構成済ディレクトリでグループが検索されます。
- 「グループ名」を選択すると、グループ名に基づいて検索されます。「説明」を選択すると、グループの説明に基づいて検索されます。
- グループを取得するための条件を入力します。* (アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのグループが取得されます。
- 「検索」をクリックします。
- 「使用可能なグループ」からグループを選択し、をクリックします。


選択したグループが「割り当てられたグループ」に表示されます。選択したグループを除去するには、「割り当てられたグループ」から

グループを選択し、をクリックします。


- **オプション:** この手順を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのグループを取得して割り当てます。
2. 割り当てられたグループを除去するには:
- 「割り当てられたグループ」から、除去するグループを選択します。
Shared Services を使用して、割り当てられたグループを検索すると、除去するグループを識別できます。「割り当てられたグループ」リストの上にあるフィールドを使用して、割り当てられたグループ・リスト内を検索する検索条件を定義します。

-  をクリックします。

6 「ユーザー・メンバー」タブを開き、[手順 6.1](#) または [手順 6.2](#)、あるいはその両方のアクションを実行してユーザーの割当てを変更します。

1. グループにユーザーを追加するには:
- 「ディレクトリ」で、ユーザーの追加元のユーザー・ディレクトリを選択します。「すべて」を選択すると、すべての構成済ディレクトリでユーザーが検索されます。
 - 検索するユーザー・プロパティ(「ユーザー名」、「名」、「姓」、「電子メール・アドレス」または「説明」)を選択します。
 - ユーザーを取得するための条件を入力します。*(アスタリスク)をワイルドカードとして使用すると、使用可能なすべてのユーザーが取得されます。
 - 「検索」をクリックします。
 - 「使用可能なユーザー」から、グループに割り当てるユーザーを選択します。
 -  をクリックします。
選択したグループは、「割り当てられたユーザー」リストに表示されます。
 - **オプション:** この手順を繰り返して、他のユーザー・ディレクトリのユーザーを取得して割り当てます。

2. ユーザーをグループから除去するには:
- 「割り当てられたユーザー」から、除去するユーザーを選択します。
Shared Services を使用して、割り当てられたユーザーを検索すると、除去するユーザーを識別できます。「割り当てられたユーザー」リストの上にあるフィールドを使用して、検索条件を定義します。

-  をクリックします。

7 「委任リスト」(委任された管理モードで Shared Services が配置されている場合にのみ有効です)を選択し、グループに割り当てられた、委任された管理者を表示します。

8 「OK」をクリックします。

グループの削除

グループを削除すると、グループに関連付けられたユーザーおよび役割が除去され、ネイティブ・ディレクトリからグループの情報が除去されます。ただし、削除されたグループに割り当てられたユーザーまたはサブグループは削除されません。

▶ グループを削除するには:

- 1 機能の管理者またはディレクトリ・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「ビュー・ペイン」から、「グループ」を選択します。
- 3 削除するグループを検索します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
- 4 グループを右クリックして、「削除」を選択します。
- 5 「はい」をクリックして削除操作を確認します。
- 6 「OK」をクリックします。

役割の管理

役割は、ユーザーが EPM System アプリケーションで実行できるタスクを定義します。登録されたすべての EPM System アプリケーションからの役割は表示できますが、Shared Services Console から更新または削除できません。機能の管理者およびプロビジョニング・マネージャは次のタスクを実行できます。

- [46 ページの「集約役割の作成」](#)
- [47 ページの「集約役割の変更」](#)
- [48 ページの「集約役割の削除」](#)
- [58 ページの「プロビジョニング・レポートの生成」](#)

注： 新しく作成されたユーザーおよびグループをプロビジョニングできます。ただし、新しいユーザーおよびグループにプロビジョニングされた役割が有効になるのは、Shared Services がキャッシュをリフレッシュした後のみです。キャッシュのデフォルトのリフレッシュ間隔は 60 分です。この値は、「Shared Services セキュリティ・キャッシュのリフレッシュ間隔」の値を更新することで変更できます。この値を短い間隔(たとえば、30 分)に設定すると、パフォーマンスが低下する可能性があります。

集約役割の作成

管理とプロビジョニングを円滑にするために、機能の管理者およびプロビジョニング・マネージャは、アプリケーション固有の複数の役割をカスタムな 1 つの Shared Services 役割に関連付ける集約役割を作成できます。Shared Services のプロビジョニング・マネージャ役割を持つユーザーは、プロビジョニング・マネージャ

を担当するアプリケーションの集約役割を作成できます。機能の管理者は、EPM System のすべてのアプリケーションの集約役割を作成できます。

集約役割については、[16 ページの「集約役割」](#)を参照してください。

注： 役割を作成できるのは、少なくとも 1 つの EPM System アプリケーションを Shared Services に登録した後のみです。

▶ 集約役割を作成するには:

1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。

[9 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

2 「ビュー・ペイン」で、「ネイティブ・ディレクトリ」を展開します。

3 「役割」を右クリックし、「新規役割」を選択します。

4 「名前」に、役割の名前を入力します(最大 256 文字)。

役割名には、特殊文字を含むことはできません。また、\ (円記号(バックスラッシュ))で開始または終了できません。

5 オプション: 「説明」に、役割の説明を入力します。


6 「製品名」から、役割を作成するアプリケーションを選択します。

7 「次へ」をクリックします。

8 「役割メンバー」タブで、追加する役割を見つけます。

- 「検索」をクリックして、選択したアプリケーションからすべての役割を取得します。
- 特定の役割を検索するには、「役割名」に役割名を入力し、「検索」をクリックします。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。


9 「使用可能な役割」から、割り当てるアプリケーション役割を選択します。

10  をクリックします。

選択した役割は、「割り当てられた役割」に表示されます。

選択した役割を除去するには、「割り当てられた役割」から役割を選択し、



 をクリックします。

11 「終了」をクリックします。

12 「OK」をクリックして「参照」タブに戻るか、「追加作成」をクリックして別のカスタムの役割を作成します。


集約役割の変更


集約役割のみを変更できます。デフォルト・アプリケーション固有の役割は、Shared Services から変更できません。製品名以外のすべての役割プロパティを変更できます。

▶ 集約役割を変更するには:


- 1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「ビュー・ペイン」で、「ネイティブ・ディレクトリ」を展開します。
- 3 「役割」を選択します。
- 4 集約役割を取得します。11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。
- 5 役割を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 6 「全般」タブで名前と説明を編集して、役割の全般的なプロパティを変更します。
- 7 役割メンバーの割当てを変更する場合は、「役割メンバー」で、[手順 7.1](#)、[手順 7.2](#)、または両方のアクションを実行します。

1. 役割メンバーを追加するには:

- 追加する役割を取得します。
 - 「検索」をクリックして、すべての役割を取得します。
 - 特定の役割を取得するには、「役割名」に役割名を入力し、「検索」をクリックします。パターン検索では、アスタリスク(*)をワイルドカードとして使用します。
- 「使用可能な役割」から、1つ以上の役割を選択します。
-  をクリックします。選択した役割が「割り当てられた役割」に表示されます。

「割り当てられた役割」から役割を選択し、 をクリックすると、選択された役割が除去されます。

2. 役割の割当てを除去するには:

- 「割り当てられた役割」から、除去する役割を選択します。
-  をクリックします。

8 「OK」をクリックします。

集約役割の削除

Shared Services から作成される集約役割を削除できます。アプリケーション固有の役割は削除できません。

▶ 集約役割を削除するには:

- 1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。
9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「ビュー・ペイン」で、「ネイティブ・ディレクトリ」を展開します。

- 3 「役割」を選択します。
- 4 集約役割を取得します。
11 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
- 5 役割を右クリックし、「削除」を選択します。
- 6 「はい」をクリックします。
- 7 「OK」をクリックします。

ネイティブ・ディレクトリのバックアップ

ネイティブ・ディレクトリは、Shared Services データベースの一部です。メディア障害、ユーザー・エラー、および予期せぬ状況によるデータの損失からリカバリするために、データベース・バックアップ・ツールを使用して、Shared Services データベースを定期的にバックアップする必要があります。

この章の内容

プロビジョニングについて.....	51
グループのプロビジョニング.....	54
グループのプロビジョニング解除.....	54
監査セキュリティ・アクティビティおよびライフサイクル管理アーティファクト.....	55
監査データの手動での削除.....	56
アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択.....	57
削除間隔の変更.....	57
レポートの生成.....	58
ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート.....	61

プロビジョニングについて

組織にはそれぞれ一意のプロビジョニングの要件があります。この項では、ユーザーとグループに Shared Services の役割をプロビジョニングする一般的なフローについて説明します。

ユーザーとグループへの Shared Services の役割のプロビジョニングは、アプリケーションを管理して、プロビジョニングできる管理レベルのユーザーを作成するために主に設計されています。EPM System 製品ユーザーとグループには、Shared Services の役割をプロビジョニングする必要はありません。アクセスする必要がある EPM System 製品およびアプリケーションからのみの役割が必要となります。

プロビジョニングを開始する前に

プロビジョニングを開始する前に、次のアクティビティを完了しておくようにします。

- EPM System 製品をプロビジョニングする方法をプランします:
 - 使用可能な役割を理解します。EPM System 製品の役割のリストは、71 ページの「[Foundation Services 役割](#)」を参照してください。
 - 使用可能なアーティファクトレベルのアクセス権を理解します。多くの EPM System 製品は、アーティファクトへのアクセスを制限するために、アクセス制御リスト(ACL)を使用したアーティファクトレベルのプロビジョ

ニングを順守させます。たとえばアカウントは、アクセス権を設定できる Planning アーティファクトです。

- プロビジョニングに対してユーザーとグループを識別します。これらのユーザーとグループは、ネイティブ・ディレクトリまたは外部のユーザー・ディレクトリに属することができます。
- プロビジョニング・モードの、集中(デフォルト)、または委任された管理モードのいずれかを決定します。委任された管理者に割り当てられている役割の範囲は、これらの管理者に割り当てられた委任リストに制限されます。たとえば、ユーザー Admin1 が DelegatedList1 用の Essbase プロビジョニング・マネージャの役割を割り当てられた場合、Admin1 は DelegatedList1 からのユーザーのみをプロビジョニングできます。第 4 章「委任されたユーザー管理」を参照してください。

プロビジョニング・ステップの概要

Shared Services のすべてのプロビジョニング・アクティビティは、機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャが実行する必要があります。

ユーザーとグループのプロビジョニングは、組織専用調整されたプロビジョニング・プランに従う必要があります。一般に、機能の管理者およびアプリケーション固有のプロビジョニング・マネージャを作成して、EPM System ユーザーとグループをプロビジョニングします。組織の必要に応じて、たとえば、LCM 管理者のようなその他のパワー・ユーザーを、Shared Services の役割を割り当てることにより作成することもできます。使用可能な役割およびそのアクセス権の詳細は、71 ページの「Foundation Services 役割」を参照してください。

EPM System 製品では、管理者とエンド・ユーザーの 2 つのタイプのユーザーを持つことができます。一般に、管理者は、ユーザー・ディレクトリの管理、アプリケーションの作成、ユーザーとグループのプロビジョニング、およびアプリケーションおよびアーティファクトの移行など、管理的なアクションを実行することで EPM System 製品をサポートします。エンド・ユーザーは、アプリケーションの機能を利用して、たとえば、Planning アプリケーションを使用してプランを作成します。

一般に、管理ユーザーは EPM System 製品の機能を実行できません。たとえば、機能の役割の割当てがない場合、Planning プロビジョニング・マネージャは、Planning アプリケーションを使用してプランを作成または管理できません。

管理ユーザーのプロビジョニング

管理ユーザーとグループのプロビジョニングは、必要な EPM System 製品の管理者の役割を割り当てるのに、Shared Services Console を使用する必要があります。たとえば、Planning プロビジョニング・マネージャの役割により、受信者は、ユーザーとグループに Planning の役割をプロビジョニングできます。その他の EPM System 製品には類似した管理の役割があります。機能の管理者は Shared Services Console を使用して、これらの管理の役割をユーザーとグループに割り当てる必要があります。

役割を組み合わせ、追加のアクセス権をユーザーまたはグループに割り当てたり、EPM System コンポーネント間の管理アクセスを提供したりできます。プロビジョニング・マネージャとディレクトリ・マネージャの役割を組み合わせることはお薦めしません。

EPM System ユーザーのプロビジョニング

ユーザーにアプリケーションの役割をプロビジョニングして、EPM System 製品にアクセスできるようにする必要があります。機能の管理者およびプロビジョニング・マネージャは、次のステップを実行してユーザーとグループにプロビジョニングします。

1. Shared Services Console から、EPM System へのアクセスを必要とするユーザー (またはユーザーが所属するグループ) を識別して選択します。11 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
2. EPM System コンポーネントへのユーザーのアクセスを許可する役割を割り当てます。たとえば、すべての Oracle Essbase ユーザーには、Essbase クラスタ (デフォルトでは EssbaseCluster-1) のサーバー・アクセスの役割が必要です。54 ページの「グループのプロビジョニング」を参照してください。

EPM System の役割は、付録 A 「EPM System 役割」で説明されています。

3. EPM System アプリケーションの機能へのアクセスを許可する、アプリケーション固有の役割を割り当てます。たとえば、Essbase アプリケーション Esb_App1 では、Esb_App1 の計算スクリプトを操作する必要があるユーザーに割り当てられる計算の役割が提供されます。

これらの役割は、アプリケーションを基準に割り当てられます。たとえば、Essbase アプリケーション Esb_App1 からの役割では、ユーザーは Esb_App1 の機能にのみアクセスできます。

4. 製品管理画面を使用して、EPM System アプリケーションによって管理されるアーティファクトへのアクセスを割り当てます。

次の手順を使用して、Shared Services Console から一部のアプリケーションの管理画面を起動します。

アーティファクトレベルのアクセス制御では、管理者は、アプリケーション・オブジェクトへのアクセスを詳細に設定できます。これらのアクセス権は、設計上、アプリケーションの役割より詳細なため、役割を使用して許可されたアクセス権の制限に使用できます。

1. Shared Services Console のビュー・ペインで、「アプリケーション・グループ」を展開します。
2. アプリケーションを含むアプリケーション・グループ・ノードを展開します。
3. プロビジョニングするアプリケーションを右クリックします。
4. 「アクセス権の割当て」を選択します。Shared Services Console の一部ではない、製品管理画面が開きます。
5. ユーザーをプロビジョニングします。

アーティファクトレベルのアクセス制御は、EPM System 製品の管理ガイドで説明されています。

グループのプロビジョニング

プロビジョニングは、EPM System の役割をユーザーとグループに許可するプロセスです。プロビジョニングは、EPM System アプリケーションの役割をグループに割り当てることにより、プロビジョニング・マネージャまたは機能の管理者によって実行されます。14 ページの「[プロビジョニング\(役割ベースの認証\)](#)」を参照してください。

注： プロビジョニング・マネージャは、自身のプロビジョニング・データを変更できません。

ヒント： 管理を促進するには、ユーザーではなくグループをプロビジョニングして、集約された役割を使用することをお勧めします。

▶ ユーザーまたはグループをプロビジョニングするには:

1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして **Shared Services Console** にアクセスします。

9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。

2 プロビジョニングするグループを検索して選択します。

11 ページの「[ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索](#)」を参照してください。

3 「管理」、「プロビジョニング」の順に選択します。

4 **オプション:** ビューを選択します。

役割は、階層(ツリー)またはリストに表示できます。階層をドリルダウンし、使用可能な役割を表示する必要があります。リスト・ビューでは、使用可能な役割が表示されますが、階層は表示されません。

5 役割を選択し、をクリックします。

6 「OK」をクリックします。

グループのプロビジョニング解除

プロビジョニング解除により、グループに割り当てられているアプリケーションの役割が削除されます。機能の管理者 1 つ以上のアプリケーションから役割をプロビジョニング解除できます。アプリケーションのプロビジョニング・マネージャにより、アプリケーションから役割をプロビジョニング解除できます。たとえば、グループ Sales_West は、Planning および Oracle Hyperion Financial Management から役割をプロビジョニングされると仮定します。このグループが Planning プロビジョニング・マネージャによりプロビジョニング解除される場合、Planning からの役割のみが解除されます。

注： 機能の管理者は自身のアカウントをプロビジョニング解除できます。Shared Services には、ネイティブ・ディレクトリに少なくとも 1 人のシステム管理者 (Shared Services 管理者の役割でプロビジョニングされたユーザー) が必要であるため、管理者は自身をプロビジョニング解除する前にこのようなアカウントの存在を確認する必要があります。

▶ グループをプロビジョニング解除するには:

- 1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。
9 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。
- 2 プロビジョニング解除するグループを検索します。
11 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」を参照してください。
- 3 グループを右クリックし、「プロビジョニング解除」を選択します。
- 4 次のいずれかのアクションを行います:
 - 役割割当てを特定のアプリケーションから除去するには、選択を行います。
 - すべてのプロビジョニングされた役割を除去するには、「すべて確認」を選択します。
- 5 「OK」をクリックします。
- 6 確認のダイアログ・ボックスで、「はい」をクリックします。
- 7 「プロビジョニング解除の要約」画面で、「OK」をクリックします。

監査セキュリティ・アクティビティおよびライフサイクル管理アーティファクト

Shared Services を使用すると、プロビジョニングおよびライフサイクル管理アクティビティの監査では、セキュリティ・オブジェクト、およびライフサイクル管理機能を使用してエクスポートまたはインポートされるアーティファクトへの変更を追跡できます。

監査は、グローバル、アプリケーション・グループおよびアプリケーションの 3 つのレベルで構成できます。

グローバル・レベルでは、Shared Services で処理されるセキュリティおよびアーティファクトを監査できます。アプリケーション・グループレベルおよびアプリケーションレベルの監査では、Shared Services を介して実行されるアプリケーション・グループまたはアプリケーションに関連するセキュリティ・アクティビティの監査が可能です。Shared Services 外で実行されるアプリケーション・グループおよびアプリケーション・セキュリティのアクティビティ、たとえば Essbase における計算スクリプトの割当てなどは監査できません。

デフォルトでは、監査は使用不可になっています。機能の管理者のみが、監査を使用可能であるか、またはグローバル・レベルで監査されるオブジェクトおよび

アーティファクトのリストを変更できます。監査構成の変更を有効にするには、すべての EPM System 製品を再起動する必要があります。

▶ 監査構成を変更するには:

- 1 機能の管理者として Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「管理」、「監査の構成」の順に選択します。
- 3 「監査構成」画面で、次のアクションを行います:
 - 1 「監査の使用可能」を選択して監査をアクティブにします。このオプションが選択されていない場合、Shared Services はどのレベルでも監査をサポートしません。デフォルトでは、監査は使用不可になっています。
 - 2 「グローバル設定のオーバーライド許可」を選択し、アプリケーション・グループおよびアプリケーションレベルの監査を使用不可にします。このオプションが選択されている場合、アプリケーション・グループおよびアプリケーション・レベルのタスクの選択は破棄され、グローバル選択が使用されます。
 - 3 **オプション:** システムから古い監査データを削除するには、「次より古いファイルを削除」で、監査データを保持する日数を設定します。「OK」をクリックすると古い監査データに除去のマークが付きます。
 - 4 「タスクの選択」から、監査データが保持されるタスクを選択します。タスクは、Shared Services で登録されるアプリケーションに基づいて分類されます。
 - 5 「OK」をクリックします。
- 4 Shared Services を含む EPM System 製品を再起動します。

監査データの手動での削除

EPM System では、Oracle Hyperion Shared Services レジストリに指定した削除設定に基づき、Shared Services データベースから監査データは自動的に削除されます。この手順を使用して監査データを手動で削除します。

注意 機能の管理者は、会社の監査データ保持規定に基づいてデータを削除する必要があります。データを削除する前に、Shared Services データベースをバックアップしてください。

▶ 監査データを削除するには:

- 1 機能の管理者として Shared Services Console にアクセスします。9 ページの「[Shared Services Console の起動](#)」を参照してください。
- 2 「管理」、「監査の構成」の順に選択します。
- 3 「次より古いファイルを削除」で、監査データを保持する日数を設定します。
- 4 「OK」をクリックします。

アプリケーションおよびアプリケーション・グループレベルの監査オブジェクトの選択

機能の管理者のみが、アプリケーションおよびアプリケーション・グループ・レベルで監査用のオブジェクトを選択できます。

▶ 監査用のオブジェクトを選択するには:

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。9 ページの「**Shared Services Console の起動**」を参照してください。
 - 2 ビュー・ペインで、次のうち 1 つを右クリックし、「監査の構成」を選択します。
 - アプリケーション・グループ内のすべてのアプリケーションに対する監査を使用可能にするアプリケーション・グループ
 - アプリケーションに対する監査を使用可能にするアプリケーション
- 注:** 「グローバル設定の上書きを許可」が「監査構成」画面で選択されている場合、「監査の構成」は、アプリケーション・グループおよびアプリケーション・レベルで使用できません。55 ページの「**監査セキュリティ・アクティビティおよびライフサイクル管理アーティファクト**」を参照してください。
- 3 「タスクの選択」から、監査データが保持されるタスクを選択します。タスクは、**Shared Services** で登録されるアプリケーションに基づいて分類されます。
 - 4 「OK」をクリックします。

削除間隔の変更

デフォルトでは、バックグラウンド・スレッドで 25 日間より古い監査データは削除されます。AUDIT.PURGE.EARLIERTO.DAYS Oracle Hyperion Shared Services レジストリ設定を変更して、削除間隔を変更できます。

▶ 削除間隔を変更するには:

- 1 **Foundation Services** サーバー・ホスト・マシンでコマンド・プロンプトを開始し、EPM_ORACLE_HOMEbin に移動します。たとえば、Windows サーバーの C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1\bin です。
- 2 次のコマンドを使用して、現在の削除間隔を表示します。

```
epmsys_registry.bat view SHARED_SERVICES_PRODUCT/@AUDIT.PURGE.EARLIERTO.DAYS
```

- 3 次のコマンドを使用して、現在の削除間隔を更新します。

```
epmsys_registry.bat update SHARED_SERVICES_PRODUCT/  
@AUDIT.PURGE.EARLIERTO.DAYS  
NEW_PURGE_INTERVAL
```

前のコマンドで、NEW_PURGE_INTERVAL を監査データが保存される日数で置き換えます。たとえば、監査データを 6 か月保持する場合、次のコマンドを使用します。

```
epmsys_registry.bat update SHARED_SERVICES_PRODUCT/  
@AUDIT.PURGE.EARLIERTO.DAYS 180
```

4 手順 2 を繰り返して、削除間隔が更新されたことを確認します。

レポートの生成

Shared Services では、プロビジョニング・レポート、監査レポートおよび移行ステータス・レポートの 3 つのタイプのレポートが生成できます。参照:

- 58 ページの「[プロビジョニング・レポートの生成](#)」
- 59 ページの「[監査レポートの生成](#)」
- 60 ページの「[移行ステータス・レポートの生成](#)」

プロビジョニング・レポートの生成

機能の管理者およびプロビジョニング・マネージャは、Shared Services Console のレポート機能を使用して、ユーザーおよび役割のプロビジョニング・データをレビューできます。プロビジョニング・レポートには、選択したアプリケーションからの役割に割り当てられたユーザーの情報、およびユーザーに割り当てられている選択したアプリケーションからの役割の情報を含むことができます。またレポートには、プロビジョニングされた役割をユーザーに許可する責任のあったオリジナルのグループまたは役割で始まる、継承の順序を示す継承情報も含まれます。

プロビジョニング・レポートでは、機能の管理者およびプロビジョニング・マネージャが、EPM System アプリケーション全体でユーザーに許可されたアクセス権および権限をレビューできます。このレポートは、コンプライアンス・レポートへのユーザーのアクセスを追跡するのに役に立ちます。

ネイティブ・ディレクトリの WORLD グループがプロビジョニングされている場合、WORLD グループから継承される役割は、このレポートがユーザーまたはグループのために生成されている場合のみプロビジョニング・レポートに含まれません。

▶ プロビジョニング・レポートを生成するには:

1 機能の管理者またはプロビジョニング・マネージャとして Shared Services Console にアクセスします。

[9 ページの「Shared Services Console の起動」](#)を参照してください。

2 役割を選択します。

[11 ページの「ユーザー、グループ、役割および委任リストの検索」](#)を参照してください。

- 3 「管理」、「レポートの表示」の順に選択します。
- 4 レポート生成パラメータを入力します。

表2 レポートの表示画面

ラベル	説明
「すべて検索」	レポートが生成されるオブジェクト・タイプ(ユーザー、グループまたは役割)を選択します。
「ユーザー」または「役割」	このラベルは「すべて検索」で選択される内容に応じて変わります。
「フィルタ条件」	レポート・データをフィルタするために使用する基準。
「有効な役割の表示」	「はい」を選択すると、すべての有効な役割(継承済および直接割り当てられた)に関してレポートします。継承済役割(直接割り当てられた役割とは対照的)は、ユーザーまたはグループが属するグループに割り当てられます。「いいえ」を選択すると、直接割り当てられた役割に関してのみレポートします。
「グループ」	レポートのデータをグループ化する方法を選択します。使用可能なグループ化の基準は「すべて検索」の選択内容によって異なります。
「1 ページ当たりの結果数」	1 ページに表示するレポート結果の数。デフォルトは 500 です。
「アプリケーション」	プロビジョニング・データのレポート元のアプリケーションを選択するか、または「すべて選択」を選択してすべてのアプリケーションに関してレポートします。 注: アプリケーション・グループに属するアプリケーションに関してのみレポートできます。

- 5 「レポート作成」を選択します。
- 6 **オプション:** レポートを印刷するには:
 1. 「印刷プレビュー」をクリックします。
 2. 「印刷」をクリックします。
 3. プリンタを選択して、「印刷」をクリックします。
 4. 「閉じる」をクリックします。
- 7 **オプション:** 「CSVにエクスポート」をクリックして、レポートをカンマ区切りの値(CSV)ファイルにエクスポートします。
- 8 「OK」をクリックします。

監査レポートの生成

セキュリティ・レポート、アーティファクト・レポート、および構成レポートの3つの監査レポートを生成できます。セキュリティ・レポートには、監査を構成するセキュリティ・タスクに関する監査情報が表示されます。アーティファクト・レポートには、ライフサイクル管理を使用してインポートまたはエクスポートされたアーティファクトの情報が表示されます。

機能の管理者は、監査レポートを生成および表示し、セキュリティ・データの変更履歴を追跡できます。

注： 監査は、監査レポートを生成する前に構成される必要があります。55 ページの「監査セキュリティ・アクティビティおよびライフサイクル管理アーティファクト」を参照してください。

▶ 監査レポートを生成するには:

- 1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。
- 2 「管理」、「監査レポート」の順に選択します。
- 3 次のいずれかのオプションを選択します:
 - 「セキュリティ・レポート」。セキュリティ監査レポートを生成します。
 - 「アーティファクト・レポート」。ライフサイクル管理を使用して移行されたアーティファクトに関するレポートを生成します。
 - 「構成レポート」。実行された構成タスクに関するセキュリティ監査レポートを生成します。

注： これらのレポートは自動的に生成され、過去 30 日間のユーザーのデータを表示します。

- 4 レポートを再生成するには、**パラメータ**を選択します:
 - 1 「実行者」で、レポートが生成されるユーザーを選択します。
 - 2 「実行された期間」で、レポートを生成する期間を選択します。その期間は、日数、または日付範囲として設定できます。
 - 3 **オプション:** 「詳細ビュー」を選択して、変更された属性、および新規の属性値に基づいてレポート・データをグループ化します。
 - 4 **オプション:** 「ページ当たり」では、レポート・ページで表示するデータの行数を選択します。
 - 5 「レポートの表示」をクリックします。
- 5 レポート・データを含む **CSV ファイル**を作成するには、「**エクスポート**」をクリックします。
 - 1 「CSV として保存」を選択します。
 - 2 「OK」をクリックします。
 - 3 「開く」をクリックしてファイルを開くか、または「保存」をクリックしてファイル・システムにファイルを保存します。デフォルトの名前は、セキュリティ・レポート・ファイルは `auditsecurityreport.csv`、アーティファクト・レポートは `AuditArtifactReport.csv`、および構成レポートは `AuditConfigReport.csv` になっています。
- 6 「閉じる」をクリックします。

移行ステータス・レポートの生成

移行ステータス・レポートには、ライフサイクル管理機能を使用して実行されたアーティファクトの移行に関する情報が含まれています。各移行について、この

レポートには、移行を実行したユーザー、ソース、宛先、開始時間、完了時間、継続時間、ステータスなどの情報が示されます。

失敗した移行の場合、ソースおよび宛先のアプリケーション、アーティファクト・パス、アーティファクト名、および移行の失敗の原因となるエラーなどの情報を表示できます。

▶ 移行ステータス・レポートを生成するには:

1 機能の管理者として **Shared Services Console** にアクセスします。

2 「管理」、「移行ステータス・レポート」の順に選択します。

このレポートは、自動的に生成され、過去 30 日間に実行された移行をすべて表示します。

3 レポートを再生成するには、「リフレッシュ」をクリックします。

4 レポートを閉じるには、「取消し」をクリックします。

ネイティブ・ディレクトリ・データのインポートとエクスポート

ライフサイクル管理を使用して、次のタスクを実行します。

- 環境全体でのプロビジョニング・データの移動
- ユーザーとグループのバルク・プロビジョニング
- ネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループの管理

Oracle Enterprise Performance Management System Lifecycle Management Guide を参照してください。

7

タスクフローの管理

この章の内容

タスクフローについて.....	63
タスクフロー・コンポーネント.....	63
タスクフローを使用するための前提条件.....	65
タスクフローの作成および管理.....	65
タスクフロー情報の表示.....	68
タスクフローのスケジュール.....	68
タスクフローの手動実行.....	69
タスクフロー・ステータスの表示および実行の詳細.....	69
タスクフロー・スクリプトの場所.....	70

タスクフローについて

タスクフローは、すべてまたは一部のビジネス・プロセスを自動化します。タスクは、一連のプロシージャ・ルールに基づいて、特定のタスクフロー参加者から別の参加者に渡されます。タスクフローは、Financial Management、Profitability and Cost Management、Performance Management Architect などの EPM System コンポーネントの製品タスクを自動化します。

自動と手動の2つのタイプのタスクフロー・アクションがサポートされています。自動タスクフロー・アクションはワークフロー・エンジンによって開始され、ユーザーが操作しなくとも、EPM System コンポーネントによって実行されます。手動タスクフロー・アクションはワークフロー・エンジンによって開始されますが、ユーザーが手動で実行します。

タスクフロー・コンポーネント

一般的にタスクフローは、複数の変数、ステージおよびリンクを使用するよう設計されています。

ステージ

ステージは、通常1人の個人が実行するタスクフロー内の手順を説明します。各ステージには、タスクフローに1つのアプリケーション・アクションまたはイベントがあります。アクションには、実行時に値が提供されるパラメータを設定できます。

タスクフローを使用する各 EPM System コンポーネントには、使用可能なデフォルトのアクションが多数あります。これらのアクションは、タスクフローに対応している EPM System コンポーネントによって、定義および管理されます。Shared Services のデフォルトのアクションは、表 3 に記載されています。その他の EPM System コンポーネントで使用可能なアクションの配置については、次の情報ソースを参照してください:

- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide のアクションの詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect 管理者ガイド』
- Oracle Hyperion Financial Management User's Guide のアクションの詳細は、『Oracle Hyperion Financial Management ユーザー・ガイド』

表 3 デフォルトのステージ・アクションおよびパラメータ: Shared Services

アクション	パラメータ
電子メール 1	<p>このアクションにより、電子メール・メッセージが自動的に送信されます。次の電子メール・アクションのパラメータを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 宛先: 受信者の電子メール・アドレスを入力します ● 件名: 電子メールの件名を入力します ● メッセージ: 変数を選択して(変数リストから変数をダブルクリック)、成功か失敗かを表示します。 ● 変数: 電子メール・アクションに使用可能な変数をリストします。
実行	<p>このアクションにより、コマンド・ラインから外部プログラムが実行されます。次の実行アクションのパラメータを入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● コマンド: 外部プログラムを実行するコマンドを入力します。 <p>外部プログラムは、有効なコマンド・ライン・スクリプト(Windows の .bat スクリプトまたは UNIX の .sh スクリプトなど)、および任意の有効なプログラム実行コマンドです。スクリプト・ファイルでパスを動的に解決しないようにしてください; パスを解決するためにファイルで変数を使用すると機能しなくなります。</p> <p>たとえば、Internet Explorer を起動するには、IEXPLORE.EXE を入力します。70 ページの「タスクフロー・スクリプトの場所」を参照してください。</p>

¹ このアクションを正常に実行するには、Foundation Services で SMTP メール構成が使用可能になっている必要があります。

リンク

リンクはタスクフローのステージを接続します。リンクは、1つのステージの完了により次のステージが開始される場合は無条件に、ステージの操作結果によってタスクフローの続行方法が決定される場合は条件付きにすることができます。

リンクは、タスクフローで次に実行するアクションを指定します。すべてのステージでリンクが必要です。通常、ほとんどのステージに次の2つのリンクがあります: 成功および失敗。成功リンクには、現在のステージの結果に基づいて、次の処理ステージ(受信ステージ)を指定します。失敗リンクには、ステージのタスクフロー・アクションが失敗した場合に実行するアクションを指定します。

たとえば、Performance Management Architect のタスクフロー・ステージの Data_Synchronization アクションが成功した場合には、Performance Management Architect が Redeploying_Consolidation のステージに進むように成功リンクを設定できます。また、Data_Synchronization アクションが失敗した場合には、Performance Management Architect が処理を停止し、タスクフローを終了するように失敗リンクを設定できます。

各タスクフローの最後のステージには、タスクフローを完了する目標として、End の最終リンクが必要です。

変数

タスクフローは、実行時のライフサイクル全体をとおして参照可能なグローバル・コンテキストとして変数を使用します。タスクフロー内で作成された変数は、タスクフロー内のあるステージから別のステージに値を渡すために使用できます。

タスクフローを使用するための前提条件

EPM System には、次のようなグローバル・タスクフローの役割があります。次の役割を割り当てられたユーザーは、EPM System の任意のコンポーネントからタスクフローを使用できます。

- **タスクフローの管理:** この役割では、EPM System のコンポーネント全体で、ACL の作成、編集、スケジュール、割当て、およびタスクフローの実行が可能です。
- **タスクフローの実行:** この役割では、EPM System のコンポーネント全体で、タスクフローを実行およびスケジュールできます。この役割のみを割り当てられたユーザーは、タスクフローを作成または編集できません。

タスクフローの作成および管理

タスクフローを使用するには、EPM Workspace の「タスクフローの管理」画面、または製品固有の画面を使用します。EPM System コンポーネントからタスクフロー画面にアクセスするには、タスクフローの役割(65 ページの「タスクフローを使用するための前提条件」を参照)の他に、これらの EPM System コンポーネントへのアクセス権を付与するアプリケーション役割も必要です。

「タスクフローの管理」画面へのアクセス

タスクフローを使用するには、通常、EPM Workspace の「タスクフローの管理」画面を使用します。この画面には、タスクフローの管理の役割を持つすべての EPM System ユーザーがアクセスできます。

▶ 「タスクフローの管理」画面にアクセスするには:

- 1 EPM Workspace にログインします。
- 2 「ナビゲート」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。

- 3 「管理」、「タスクフローの管理」の順に選択します。

タスクフローの作成

▶ タスクフローを作成するには:

- 1 「タスクフローの管理」画面を開きます。65 ページの「[「タスクフローの管理」画面へのアクセス](#)」を参照してください。
- 2 「タスクフローの管理」で、「新規」をクリックします。
- 3 「名前」に、一意のタスクフロー名を入力します。
- 4 「アプリケーション」に、このタスクフローが属するアプリケーションの名前を入力します。

アプリケーション名は、「タスクフローの管理」画面でアプリケーションを分類する際に使用されます。

- 5 「説明」に、タスクフローの説明を入力します。
- 6 「送信」をクリックします。

ステージおよびリンクの追加が可能なタスクフロー・エディタが表示されます。

- 7 タスクフローにステージを追加するには:

1. 「全般」に、次の情報を入力します:

- 「名前」: ステージ名を入力します。
- 「ユーザー名」: タスクフロー・ステージの開始にアカウントを使用する EPM System ユーザーを入力します。
- 「パスワード」: 「ユーザー名」フィールドに指定したユーザーのパスワードを入力します。

2. 「処理」に、次の情報を入力します:

1. 「アプリケーション」で、タスクの実行元のアプリケーションを選択します。
2. 「アクション」で、実行するアクションを選択し、必要な情報を入力します。

「アクション」リストで選択可能なアクションは、選択したアプリケーションを反映しています。各 EPM System コンポーネントのアクション・リストは、次のトピックを参照してください:

- 使用可能な Shared Services のアクション・リストは、[表 3](#)を参照してください。
- Performance Management Architect のアクション・リストは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。
- Financial Management のアクション・リストは、Oracle Hyperion Financial Management User's Guide を参照してください。

3. 「開始イベント」に、次の情報を入力してイベントをスケジュールします:

1. 「開始イベント」で、「スケジュール済イベント」を選択します。
 2. 「開始日」に、タスクを実行する日にちを入力します。
 3. 「開始時間」で、タスクを開始する時刻を選択します。
 4. このタスクを繰り返す場合は、「繰り返し」を選択し、「繰り返しの設定」でタスクの頻度を選択します。
 5. タスクの終了日時を入力するオプションを選択します:
 - 「終了日なし」
 - 「終了条件」を選択して、終了条件数を入力します。
 - 「終了日」: 終了日を入力し「終了時刻」を選択します。
 4. 「オプション」: タスクフローにステージを追加できます。
- 8 タスクフロー・ステージにリンクを追加するには:**
1. リンクを追加するステージを選択し、「リンクの追加」をクリックします。
 2. 「全般」に、一意のリンク名とオプションの説明を入力します。
 3. 「受信ステージ」で、タスクフローの次のステージを選択します。
 4. オプション: 必要に応じて、リンク条件を設定します。
- 9 「保存」をクリックします。**

タスクフローの編集

- ▶ タスクフローを編集するには:
- 1 「タスクフローの管理」画面を開きます。65 ページの「[「タスクフローの管理」画面へのアクセス](#)」を参照してください。
 - 2 「タスクフローのリスト(要約)」から、タスクフローを選択し、「編集」をクリックします。

タスク・フローの最初のステージがデフォルトで選択されます。
 - 3 「パスワード」に、タスクフロー・ステージの初期化にアカウントを使用した EPM System ユーザーのパスワードを入力します。
 - 4 現在のステージを編集するか(必要な場合)、ステージ名をクリックして他のステージを選択します。
 1. 「全般」で、次の手順を実行します。
 1. オプション: ステージ名と、タスクフローの初期化にアカウントを使用した EPM System ユーザーを変更します。
 2. 「パスワード」に、現在のタスクフロー・ステージの初期化にアカウントを使用した EPM System ユーザーのパスワードを入力します。
 2. 「処理」で、次のステージ処理情報を変更します。このタブの任意のフィールドの値を変更できます。
 - 使用可能な Shared Services のアクション・リストは、[表 3](#)を参照してください。

- Performance Management Architect のアクション・リストは、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide を参照してください。
 - Financial Management のアクション・リストは、Oracle Hyperion Financial Management User's Guide を参照してください。
3. 「開始イベント」で、ステージ開始のスケジュールを変更します。
 4. オプション: 必要に応じて、リンクを変更します。

注: リンクを編集するには、少なくとも、現在のタスクフロー・ステージの初期化にアカウントを使用した EPM System ユーザーのパスワードを入力する必要があります。

1. 編集するリンクの名前をクリックします。
2. 「全般」で、名前、説明、受信ステージなど、リンクの詳細を編集します。リンクの送信ステージは変更できません。
3. オプション: 必要に応じて、リンク条件を変更します。

- 5 「保存」をクリックします。

タスクフロー情報の表示

「タスクフローの管理」の「タスクフローのリスト(要約)」には、定義済のすべてのタスクフローがリストされます。

▶ タスクフロー情報を表示するには:

- 1 「タスクフローの管理」画面を開きます。65 ページの「[「タスクフローの管理」画面へのアクセス](#)」を参照してください。
- 2 表示するタスクフローを選択します。
- 3 「編集」をクリックします。

タスクフローのスケジュール

タスクフローの実行は、「タスクフローの管理」画面からスケジュールできます。

▶ 既存のタスクフローをスケジュールするには:

- 1 「タスクフローの管理」画面を開きます。65 ページの「[「タスクフローの管理」画面へのアクセス](#)」を参照してください。
- 2 スケジュールするタスクフローを選択します。
- 3 「タスクフローのスケジュール」をクリックします。
- 4 「開始イベント」で、「スケジュール済イベント」を選択します。
- 5 「開始日」に、タスクフローを実行する日にちを選択します。

- 6 「開始時間」で、ドロップダウン・リストを使用して、タスクフローの実行を開始する時刻を選択します。
- 7 **オプション:** ジョブを繰り返し実行するようにスケジュールには:
 1. 「繰り返し」を選択します。
 2. 「繰り返しの設定」で、「月」や「週」などの繰り返しの設定を選択します。
 3. 選択した繰り返し設定の頻度をスケジュールします。
- 8 **オプション:** タスクフローを、手動で取り消されるか削除されるまで実行するようにスケジュールするには、「終了日なし」を選択します。
- 9 **オプション:** タスクフローを指定した回数実行するようにスケジュールするには、「x回後に終了」を選択します。テキスト・ボックスにジョブを実行する回数を入力します。
- 10 **オプション:** 指定した日付までタスクフローを実行するには、「終了日」を選択し、最後に実行する日時を選択します。
- 11 「保存」をクリックします。

タスクフローの手動実行

- ▶ タスクフローを実行するには:
- 1 「タスクフローの管理」画面を開きます。65 ページの「[「タスクフローの管理」画面へのアクセス](#)」を参照してください。
 - 2 実行するタスクフローを選択します。
 - 3 「今すぐ実行」をクリックします。

タスクフロー・ステータスの表示および実行の詳細

タスクフロー・ステータスを監視するには、「タスクフロー・ステータス(要約)」画面を使用します。

- ▶ タスクフローのステータスを表示するには:
- 1 EPM Workspace にログインします。
 - 2 「ナビゲート」、「アプリケーション・ライブラリ」の順に選択します。
 - 3 「管理」、「タスクフロー・ステータスの表示」の順に選択します。
 - 4 「タスクフローの管理」で、監視するタスクフローを検出する検索条件を選択します。
 - 特定の執行ステータスのタスクフローを検索するには、「ステータス」でタスクフロー・ステータスを選択します。すべてのステータスのタスクフローを検索するには、「すべて」を選択します。

- 特定のアプリケーションに属するタスクフローを検索するには、「アプリケーション」に、タスクフローが属するアプリケーションを選択します。
 - 特定のタスクフローを検索するには、「タスクフロー」にタスクフロー名を選択します。
- 5 検索を特定の期間に限定するには、「開始期間」に開始値と終了値を設定します。
 - 6 「検索」をクリックします。
 - 7 **オプション:** 「リフレッシュ」をクリックし、ステータス情報を更新します。
 - 8 **オプション:** 実行中のタスクフローを終了するには、タスクフローを選択し、「停止」をクリックします。

選択したステップの結果がアプリケーションから戻されると、タスクフローは停止します。前のステップの結果は破棄されません;ただし、タスクフローを再実行すると、最初のステップから開始されます。
 - 9 タスクフロー実行の詳細を表示するには、タスクフロー ID をクリックします。

タスクフロー参加者(要約)が表示され、タスクの詳細およびステータスが示されます。
 - 10 「取消し」をクリックし、「タスクフロー・ステータス(要約)」に戻ります。

タスクフロー・スクリプトの場所

タスクフローのステージ中に実行されるすべてのスクリプトは、専用のディレクトリに格納する必要があります。このようなスクリプトを含むディレクトリのデフォルトの場所は、EPM_ORACLE_HOME/common/utilities です。

デフォルトのディレクトリ以外のディレクトリにタスクフロー・スクリプトを格納する場合は、コマンド・プロンプトで次のいずれかのコマンドを実行して、Shared Services レジストリのプロパティを更新する必要があります。このコマンドで、SCRIPT_LOCATION を、タスクフロー・スクリプトを格納するディレクトリの絶対パスに置き換えます:

- `epmsys_registry.bat updateproperty SHARED_SERVICES_PRODUCT/
@workflowEngine.ces.location SCRIPT_LOCATION (Windows)`
- `epmsys_registry.sh updateproperty SHARED_SERVICES_PRODUCT/
@workflowEngine.ces.location SCRIPT_LOCATION (UNIX/LINUX)`

たとえば、Windows に配置している場合は、次のコマンドを実行できます:

```
epmsys_registry.bat updateproperty  
SHARED_SERVICES_PRODUCT/@workflowEngine.ces.location C:\taskflowscripts
```

SCRIPT_LOCATION ディレクトリを不正なアクセスから保護する必要があります。さらに、セキュリティを強化するために、保護されたユーザー・アカウントを使用してサービスやプロセスを実行します。

Oracle Hyperion Shared Services レジストリを更新した後、EPM System を再起動します。



EPM System 役割

この付録の内容

Foundation Services 役割	71
Essbase の役割	74
Essbase Studio 役割	76
Reporting and Analysis 役割	76
Financial Management の役割	79
Disclosure Management 役割	81
Financial Close Management 役割	81
Account Reconciliation Management 役割	82
Planning 役割	82
Profitability and Cost Management 役割	85
Performance Scorecard 役割	89
Strategic Finance 役割	90
Provider Services 役割	90
Data Integration Management 役割	90
FDM の役割	91
FDME の役割	91
Integrated Operational Planning 役割	92

Foundation Services 役割

Foundation Services 役割は、次のコンポーネントに属するパワー役割で構成されます:

- Shared Services
- Oracle Hyperion EPM Architect
- Oracle Hyperion Calculation Manager
- 74 ページの「Financial Management マネージャの役割」

Shared Services 役割

Shared Services 役割はすべてパワー役割です。通常、これらの役割は、Shared Services および他の EPM System 製品の管理を行うパワー・ユーザーに付与されます。

表 4 Shared Services 役割(グローバルな役割)

役割	説明
<p>管理者</p> <p>Shared Services 管理者の役割は、次の役割から構成されます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 統合の作成 ● ディレクトリ・マネージャ ● LCM 管理者 ● タスクフローの管理 ● タスクフローの実行 ● プロジェクト・マネージャ ● 統合の実行 	<p>Shared Services と統合される製品全体へのコントロールを行います。この役割は、EPM System の最も強力な役割であるため、慎重に割り当てる必要があります。管理者は、Shared Services Console ですべての管理タスクを実行でき、自分自身をプロビジョニングすることも可能です。</p> <p>この役割は、Shared Services に登録されたすべてのアプリケーションへの幅広いアクセス権を付与します。管理者役割はデフォルトで、admin ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーに割り当てられます。このユーザーは Shared Services の配置後に唯一使用可能であるユーザーです。</p>
統合の作成	ウィザードを使用して Shared Services データ統合(アプリケーション間でデータを移動するプロセス)を作成します
ディレクトリ・マネージャ	ネイティブ・ディレクトリのユーザーとグループを作成および管理します ディレクトリ・マネージャとプロビジョニング・マネージャの役割を 1 人のユーザーに付与すると、ユーザーは高い役割を得ることができます。ディレクトリ・マネージャの役割は、プロビジョニング・マネージャの役割が割り当てられたユーザーには割り当てないことをお勧めします。
<p>LCM 管理者</p> <p>この役割は、次の役割で構成されています:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ディレクトリ・マネージャ ● LCM デザイナ ● タスクフローの管理 ● タスクフローの実行 ● プロジェクト・マネージャ ● 統合の実行 	<p>Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理を実行して、本番環境およびオペレーティング・システム全体のアーティファクトやデータを移行します</p>
LCM デザイナ	ライフサイクル管理機能を使用して移行定義ファイルを作成することで、アーティファクトとアプリケーションの移行を設計します。この役割を持つユーザーは、移行を設計できますが、実行はできません。
タスクフローの管理	EPM System 製品のタスクフローを、作成、編集、表示、スケジュールおよび実行します。すべてのタスクフローに対して完全な制御権を保有します。
タスクフローの実行	タスクフローの管理の役割を持ったユーザーによって作成されたタスクフローを表示、スケジュールおよび実行します。Oracle Enterprise Performance Management System 製品のタスクフローの作成または編集はできません。
プロジェクト・マネージャ	Shared Services アプリケーション・グループを作成および表示します。
統合の実行	<p>Shared Services データ統合を表示および実行します</p> <p>Performance Management Architect の場合は、データ同期を実行します</p>

Performance Management Architect 役割

Performance Management Architect のすべての役割はパワー役割です。通常、これらの役割は、アプリケーションの作成およびアプリケーションの次元の管理をする必要があるパワー・ユーザーに付与されます。

表 5 Performance Management Architect 役割

役割	説明
Performance Management Architect 管理者 Performance Management Architect 管理者の役割は、次の役割から構成されます: <ul style="list-style-type: none"> ● アプリケーション作成者 <ul style="list-style-type: none"> ○ Essbase アプリケーション作成者 ○ Financial Management アプリケーション作成者 ○ Planning アプリケーション作成者 ○ Profitability アプリケーション作成者 ● 次元編集者 	Performance Management Architect のアプリケーションを作成および配置します。アプリケーション作成者は、配置されていないアプリケーションのすべての次元を所有します。作成者は次元を作成できますが、アクセス権限のある次元しか変更できません。 次元エディタ役割に加えて、Financial Management および Planning ユーザーが製品のクラシック・アプリケーション管理オプションをナビゲートできるようにするために必要です。 アプリケーション作成者役割を持つユーザーが Performance Management Architect からアプリケーションを配置するとき、そのユーザーは自動的に、アプリケーションのアプリケーション管理者とプロビジョニング・マネージャになります。 Performance Management Architect 管理者は、次のトランザクション履歴削除ユーティリティ操作も実行できます: <ul style="list-style-type: none"> ● すべてのアプリケーションにアクセス(ユーザーがアプリケーションを配置しなかった場合も) ● 停止したジョブをタイムアウトとして手動でマーク ● 非表示のジョブを表示 ● アプリケーション診断画面を開き、すべてのアプリケーションに対してテストおよびソリューションを実行
Essbase アプリケーション作成者	Performance Management Architect を使用して Essbase アプリケーションおよび汎用アプリケーションを作成します。
Financial Management アプリケーション作成者	Performance Management Architect を使用して集計アプリケーションおよび汎用アプリケーションを作成します。アプリケーションを作成するには、そのユーザーは Financial Management 構成ユーティリティで指定されたアプリケーション作成者グループのメンバーである必要があります。
Planning アプリケーション作成者	Performance Management Architect を使用して Planning アプリケーションおよび汎用アプリケーションを作成します。
Profitability アプリケーション作成者	Performance Management Architect を使用して Oracle Hyperion Profitability and Cost Management アプリケーションおよび汎用アプリケーションを作成します。
次元編集者 ¹	Performance Management Architect 内に次元を作成するためにプロファイルを作成、管理、およびインポートします。Performance Management Architect 内で手動で次元を作成および管理します。 Web ナビゲーションを使用して Financial Management および Planning のクラシック・アプリケーション管理オプションにアクセスする際に必要です。

¹ 次元編集者のみが共有ライブラリで次元を作成できます。

Calculation Manager の役割

Calculation Manager のすべての役割はパワー役割です。通常、Calculation Manager 管理者を作成するためにこれらの役割が付与されます。

表 6 Calculation Manager の役割

役割	説明
Calculation Manager 管理者 Calculation Manager 管理者の役割は、次の役割で構成されています: <ul style="list-style-type: none">● Financial Management Calculation Manager 管理者● Planning Calculation Manager 管理者	Calculation Manager 機能を管理します Financial Management Calculation Manager 管理者は Financial Management での Calculation Manager 機能を管理します Planning Calculation Manager 管理者は Planning での Calculation Manager 機能を管理します
Financial Management Calculation Manager 管理者	Financial Management の Calculation Manager 機能を管理します
Planning Calculation Manager 管理者	Planning の Calculation Manager 機能を管理します

Financial Management マネージャの役割

これらの役割では、Shared Services 管理者が Financial Management アプリケーションを管理できます。

表 7 Financial Management マネージャの役割

役割	説明
Financial Management マネージャ管理者の役割は、次の役割から構成されます: <ul style="list-style-type: none">● Financial Management 管理者● Financial Management アプリケーション作成者● Financial Management Calculation Manager 管理者	Financial Management アプリケーションを作成および管理し、Financial Management の Calculation Manager 機能を管理します
Financial Management 管理者	Financial Management アプリケーションを管理します。
Financial Management アプリケーション作成者	Financial Management のアプリケーションを作成します
Financial Management Calculation Manager 管理者	Financial Management の Calculation Manager 機能を管理します

Essbase の役割

次の表では、Essbase に固有な役割について説明します。固有の Essbase アプリケーションまたはデータベースに対するユーザーとグループへのアクセス権の付与の詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

注： Essbase アプリケーションを作成するには、Essbase 管理者役割に加え、Shared Services のプロジェクト・マネージャ役割が必要です。

表 8 Essbase サーバーの役割

役割	説明
管理者	Essbase サーバー、アプリケーション、およびデータベースへの完全な管理アクセス権を持ちます 注： プロビジョニング・マネージャ役割は、Essbase の管理者を移行するときに自動的に割り当てられます。ただし、Essbase 管理者を Shared Services Console で作成するときは、プロビジョニング・マネージャ役割を手動で割り当てる必要があります。
アプリケーションの作成/削除	アプリケーションとデータベースを作成および削除します。このユーザーが作成したアプリケーションとデータベースに対するアプリケーション・マネージャとデータベース・マネージャの権限も含まれます。
サーバー・アクセス	この Essbase サーバーに属するアプリケーションまたはデータベースにアクセスします。このレベルは、ユーザーがアプリケーションおよびデータベースにアクセスするために必要な最低限のアクセス権です。
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーにこの Essbase サーバーの役割をプロビジョニングします

表 9 Essbase アプリケーションの役割

役割	説明
アプリケーション・マネージャ	割り当てられたアプリケーション内でデータベースとアプリケーションの設定を作成、削除および変更します。アプリケーション内のデータベースのデータベース・マネージャの権限も含まれます。アプリケーション・マネージャは、自分で作成したアプリケーションおよびデータベースだけを削除できます。 注： プロビジョニング・マネージャ役割は、ユーザーが Essbase アプリケーション・マネージャを移行する際にそのユーザーに自動的に割り当てられます。ただし、Essbase アプリケーション・マネージャを Oracle Hyperion Shared Services Console で作成する場合は、プロビジョニング・マネージャ役割を自分自身に手動で割り当てる必要があります。
データベース・マネージャ	割り当てられたアプリケーション内のデータベース、データベース・アーティファクト、ロックを管理します
計算	割り当てられた計算およびフィルタを使用して割り当てられたスコープを基に、データ値の計算、更新および読取りを行います
書込み	割り当てられたフィルタを使用して、割り当てられたスコープを基に、データ値の更新と読取りを行います
読取り	データ値を読み取ります
フィルタ	フィルタの制限に応じて特定のデータとメタデータにアクセスします
アプリケーションの開始/停止	アプリケーションまたはデータベースを開始および停止します
プロビジョニング・マネージャ	Essbase ユーザーにこのアプリケーションからの役割をプロビジョニングします

Essbase Studio 役割

表 10 Essbase Studio 役割

役割	説明
Essbase Studio 管理者	キューブの配置やドリルスルー・レポートの実行などのすべての Oracle Essbase Studio のタスクの実行
Essbase Studio データ・ソース管理者	メタデータ要素の作成および維持に関連するすべてのタスクの実行; キューブの配置; ドリルスルー・レポートの実行
Essbase Studio メタデータ管理者	データ・ソース接続の作成および維持に関連するすべてのタスクの実行; ドリルスルー・レポートの実行
Essbase Studio 参照者	すべての Essbase Studio データ・ソースおよびメタデータ要素の表示; ドリルスルー・レポートの実行
プロビジョニング・マネージャ	Oracle Essbase Studio ユーザーのプロビジョニング

Reporting and Analysis 役割

表 11 Reporting and Analysis 役割

役割	説明
パワー役割	
Reporting and Analysis 管理者	(ファイルが"アクセス権なし"でロックされていないかぎり)すべてのリソースへの条件付きのアクセス権を持つが、すべての機能にアクセスできるわけではありません。管理者とインパクト・マネージャのモジュールにアクセスします。 Oracle Hyperion Financial Reporting、Oracle Hyperion Interactive Reporting、Oracle Hyperion SQR Production Reporting および Oracle Hyperion Web Analysis に適用されます
Reporting and Analysis グローバル管理者	すべてのリソースと機能に対して、全体的かつ暗黙的なアクセス権を持ちます。管理者とインパクト・マネージャのモジュールにアクセスします。 注: Reporting and Analysis グローバル管理者がアクセスを拒否されることはありません。 Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
コンテンツ・マネージャ	すべてのリソースへの暗黙的なアクセス権とともに(ファイルが"アクセス権なし"でロックされていないかぎり)、インポートされたリポジトリ・コンテンツの管理とタスクの実行を行います。データ・ソース・パブリッシャ役割を含みます。 Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
データ・ソース・パブリッシャ	データ・ソース接続ファイルをインポートします Interactive Reporting および Web Analysis に適用されます
お気に入りのディストリビュータ	お気に入りマネージャを使用して、ユーザーのお気に入りフォルダにコンテンツをプッシュします Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます

役割	説明
ジョブ・マネージャ	パブリック・ジョブ・パラメータ、出力ディレクトリ、出力プリンタの場所を作成および管理します Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます 注： この役割は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace を使用して Financial Reporting または Web Analysis にアクセスする、Financial Management および Planning ユーザーには適用されず、割り当ててはできません。
スケジュール・マネージャ	イベント、カレンダー、タイム・イベント、パブリック・パラメータ、物理リソースを作成および管理します。バッチを作成します。またスケジューラとジョブ・マネージャ役割を含みます。 Financial Reporting、Interactive Reporting、および Production Reporting に適用されます
プロビジョニング・マネージャ	Reporting and Analysis ユーザーをプロビジョニングします
対話型役割	
アナリスト	完全な分析およびレポート機能を使用して、対話型コンテンツにアクセスします Interactive Reporting および Web Analysis に適用されます
コンテンツ・パブリッシャ	バッチ、ブック、レポートおよびドキュメントをインポート、保存および変更します。ショートカットとフォルダを作成および変更します。EPM Workspace を介して、Financial Reporting でデータ・ソースとデータベース接続を削除します。 Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されません。
データ・エディタ	Web Analysis データを Essbase にプッシュします
ジョブ・パブリッシャ*	ドキュメント、ジョブ、ジョブの出力をインポートおよび変更します。ジョブを実行します。Smart Form パブリッシャ役割が含まれます。 Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人用ページのパブリッシャ*	個人用ページをリポジトリにパブリッシュします。ここでは他のリポジトリ・ユーザーが個人用ページを表示できます。個人用ページのエディタ役割が含まれます。 Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
レポート・デザイナ	ドキュメントを作成および配布するためオーサリング Studio にアクセスします Financial Reporting および Web Analysis に適用されます
スケジューラ	スケジュール・モジュールを使用してジョブとバッチをスケジュールします。リポジトリに移動し、アクセス制御を割り当てます。エクスプローラとジョブの実行者の役割が含まれます。 Financial Reporting、Interactive Reporting、および Production Reporting に適用されます
Smart Form パブリッシャ*	プログラムのカスタム・フォームをロードします(フォームはジョブの実行者にジョブの定義に使用される情報の入力を求めます) Production Reporting に適用されます 注： Smart Form パブリッシャの機能を利用するには、ジョブ・パブリッシャ役割を持っている必要があります。

役割	説明
個人用ページの エディタ*	個人用ページの作成、変更、カスタマイズを行います。他のユーザーがパブリッシュした個人用ページからコンテンツをコピーします Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
ビュー役割	
ダイナミック・ ビューア*	Interactive Reporting ドキュメントを表示、再プロセス、および印刷します。
エクスプローラ	エクスプローラ・モジュールと「開く」ダイアログ・ボックスを使用するコンテキストのリポジトリ・コンテンツをリストします。検索、表示、コンテンツへの登録など 注： リポジトリへのアクセス権は、ファイル・プロパティと権限によって保護された個別のファイルとフォルダへのアクセスを付与しません。 Financial Reporting、Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
Interactive Reporting ビューア*	静的な Interactive Reporting ドキュメントを確認および印刷します。
IR HTML ビューア	HTML ビューアを使用して BQY ドキュメントを参照します。この役割は、前のバージョンから移行されたユーザーに自動的に割り当てられません。
IR WebClient ビューア	Interactive Reporting プラグインを使用して BQY ドキュメントを参照します。この役割は、前のバージョンから移行されたユーザーに自動的に割り当てられません。
ジョブの実行者*	ジョブを実行し、パブリック・ジョブ・パラメータと物理リソースを表示します Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人用ページの エディタ*	個人用ページの作成、変更、カスタマイズを行います。他のユーザーがパブリッシュした個人用ページからコンテンツをコピーします Interactive Reporting および Production Reporting に適用されます
個人パラメータ のエディタ	クエリーの結果設定をカスタマイズするために、データベース接続で視点と個人用パラメータを定義します Interactive Reporting、Production Reporting および Web Analysis に適用されます
ビューア	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace コンテンツをレビューします。コンテンツは静的で、お気に入りフォルダのみからアクセスできます。 注： この役割は最低限のユーザー機能を提供します。他の役割を割り当てられない場合にのみ使用してください。 Financial Reporting、Oracle Hyperion Interactive Reporting、Oracle Hyperion SQR Production Reporting、および Web Analysis に適用されます
システム役割	
信頼されたアプ リケーション	Interactive Reporting データベース接続ファイル(.oce 拡張子)で、ログイン情報が必要となるクライアント・サーバー間通信を使用可能にします。この通信では、接続、データベース・タイプ、ネットワーク・アドレスおよびデータベースのユーザー名情報がカプセル化されます。

Financial Management の役割

Performance Management Architect および Calculation Manager では、その他の Shared Services 役割が必要です。71 ページの「Foundation Services 役割」を参照してください。

表 12 Financial Management の役割

役割	説明
パワー役割	
アプリケーション管理者	すべての Oracle Hyperion Financial Management タスクを実行します。この役割のアクセス権はユーザーが持つ他のアクセス設定をオーバーライドします。
システムのロード	ルールとメンバーのリストをロードします
内部取引の管理	期間の開始と終了、エンティティのロックと解除、理由コードの管理などを行います。この役割のユーザーはすべての内部タスクも実行します。
対話型役割	
ルール管理者	特定のアプリケーションに対して Calculation Manager タスクを実行します
ルール・デザイナー	新しいルール・オブジェクトの作成、ルール・オブジェクトの変更または削除を行います
仕訳の承認	仕訳の承認または拒否します
仕訳の作成	仕訳の作成、変更、削除、送信、未送信などを行います
貸借不一致の仕訳の作成	貸借不一致の仕訳を作成します
デフォルト	アプリケーションの開始と終了、ドキュメントとお気に入りの管理、Smart View の管理、実行中のタスクおよびデータ・タスクへのアクセス、タスクのロードと抽出を実行します。メタデータまたはルールの抽出はできません。
仕訳管理者	仕訳に関連したすべてのタスクを実行します
仕訳の転記	仕訳の転記と転記の戻しを実行します
テンプレートの管理	仕訳の管理のために仕訳テンプレートへのアクセス権を付与します
繰返しの生成	仕訳の管理のために繰返しの生成タスクへのアクセス権を付与します
スーパーバイザの確認	プロセス管理ユニットの開始とプロセス管理データの承認およびパブリッシュを行います。プロセス・レベルに応じてプロセス・ユニットのレベルを上げたり、または拒否したりできます。
レビュー担当者 1 から 10	データがユーザーの指定プロセス・レベルにあるとき、データのブロックを表示および編集します
送信者	最終的な承認のためにデータのブロックを送信します
データのロック	データ・エクスプローラでデータをロックします
データのロック解除	データ・エクスプローラでデータのロックを解除します
すべて集計	すべて集計を実行します
集計	集計を実行します

役割	説明
データを含むすべてを集計	すべてのデータで集計を実行します
配賦の実行	配賦を実行します
データ入力フォームの管理	Web でデータ入力フォームを管理します
サーバーでのシステム・レポートの保存	サーバーでシステム・レポートを保存します
Excel データのロード	Oracle Hyperion Smart View for Office からデータをロードします。
内部取引ユーザー	取引の作成、編集、削除、ロード、抽出を実行します。勘定科目または ID 別に照合レポートを実行したり、取引レポートの実行や複数モジュールでドリルします。
内部取引照合テンプレート	内部取引の照合テンプレートを管理します
勘定科目による内部取引の自動照合	勘定科目ごとに内部取引を自動照合します
ID による内部取引の自動照合	ID ごとに内部取引を自動照合します
許容差による内部取引の手動照合	許容差の確認をしながら、内部取引を手動で照合します
内部取引の手動照合	内部取引を手動で照合します
内部取引の照解除	内部取引の照合を解除します
内部取引の転記/転記の戻し	内部取引の転記および転記の戻しを実行します
Web グリッドでの書戻しの使用可能	Web グリッドに直接データを入力し、保存します
データベース管理	データをコピーおよび消去して、無効なレコードを削除します
所有権の管理	所有者情報を入力および編集します
カスタム・ドキュメントの管理	サーバーとの間でカスタム・ドキュメントをロードおよび抽出します
拡張分析	データベースにデータをエクスポートします
Excel から書き戻すデータ・フォーム	Web データ入力フォームを使用して Smart View からデータを送信します
ビュー役割	
上級ユーザー	ブラウザ・ビューを使用して実行中のタスクにアクセスできます
ルール・ビューア	ルール・オブジェクトを表示します
仕訳の読取り	仕訳を読み取ります
プロセス・コントロールの電子メール・アラートを受信	電子メールを受信します
内部取引の電子メール・アラートを受信	電子メールを受信します

役割	説明
予約済	現在は使用されていません
データ監査の表示	データ監査情報を表示およびエクスポートします
タスク監査の表示	タスク監査情報を表示およびエクスポートします

Disclosure Management 役割

表 13 Disclosure Management 役割

役割	説明
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーおよびグループに Oracle Hyperion Disclosure Management 役割をプロビジョニングします
Disclosure Management ユーザー	Disclosure Management アクションを実行します

Financial Close Management 役割

ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーは、Fusion Middleware に対してシングル・サインオンを使用できないため、Oracle Hyperion Financial Close Management 役割によって付与されたタスクを実行できません。ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーが Financial Close Management タスクを実行する必要がある場合、それらのユーザーを Fusion Middleware ユーザーとしても作成することが必要です。

表 14 Financial Close Management 役割

役割	説明
Close Manager 管理者	Oracle Hyperion Financial Close Management を管理します。Close パワー・ユーザーおよび Close ユーザーが実行できるタスクを実行します。
Close Manager パワー・ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● Close ユーザーが実行できるタスクを実行します ● アラート・タイプを作成および管理します
Close Manager ユーザー	<p>これらのタスクを実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● テンプレートの表示 ● Oracle Hyperion Reporting and Analysis および取引ダッシュボードへのアクセス ● ステータスの変更 ● アラート、コメントおよび質問の作成および変更 ● フィルタの作成および管理

Account Reconciliation Management 役割

表 15 Account Reconciliation Management 役割

役割	説明
Reconciliation 管理者	<ul style="list-style-type: none"> ● システム設定、フィルタ、属性、期間、調整インスタンス、レートおよびレポートへの完全なアクセス ● 自分のコメントを追加および削除します ● すでに会社にはいないユーザーによって入力されたコメントを削除する必要がある場合に対応するために、調整からコメントを削除します ● 勘定科目調整の準備または表示はできません
Reconciliation パワー・ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● フィルタ、調整プロファイル、調整インスタンスおよびレポートへの完全なアクセス ● 自分のコメントを追加および削除します ● すでに会社にはいないユーザーによって入力されたコメントを削除する必要がある場合に対応するために、調整からコメントを削除します
Reconciliation コメント者	<ul style="list-style-type: none"> ● 調整および関連する取引にコメントを追加します ● レポートを作成します ● プライベート・フィルタを作成します
Reconciliation 策定者	<ul style="list-style-type: none"> ● 調整の準備に関連するすべての機能(取引の追加、編集、フラグ設定および削除; コメントの追加と削除; 添付ファイルの追加と削除; 質問への回答; レビュー用の調整の送信など)を実行します ● レポートを作成します ● プライベート・フィルタを作成します
Reconciliation レビュー担当者	<ul style="list-style-type: none"> ● 調整のレビュー(取引へのフラグ設定、コメントの追加と削除; 調整の却下; 調整の承認など)を行います ● レポートを作成します ● プライベート・フィルタを作成します
Reconciliation 参照者	<ul style="list-style-type: none"> ● 参照者権限が付与されている調整を表示します ● レポートを作成します ● プライベート・フィルタを作成します

Planning 役割

Performance Management Architect および Hyperion Calculation Manager では、その他の Oracle Hyperion Foundation Services 役割が必要です。71 ページの「[Foundation Services 役割](#)」を参照してください。

表 16 Planning アプリケーションの役割

役割	説明
パワー役割	
管理者	アプリケーション所有者、一括割当ての役割に予約されているタスクを除き、すべてのアプリケーション・タスクを実行します。アプリケーションの作成および管理、アクセス権の管理、予算プロセスの開始、通知用電子メール・サーバーの指定を実行します。データのコピー機能を使用できます。
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーを Planning アプリケーションにプロビジョニングします
一括割当て	データを階層形式で多次元に分散する一括割当て機能にアクセスします。この機能ではデータ・フォームでは表示されないセルやユーザーがアクセス権を持たないセルへの分散も可能です。任意のユーザー・タイプにこの役割を割り当てることが可能ですが、割当てでは慎重に行ってください。
Essbase 書込みアクセス権	プランナおよび対話型ユーザーの場合: ユーザーが持つ Planning のアクセス権と同等の、Essbase の Planning データへのアクセス権をユーザーに付与します。書込みアクセス権を持つユーザーは Financial Reporting やサードパーティ製のツールなど別製品を使用して、Planning のデータを Essbase で直接変更できます。
承認管理者 承認管理者の役割は、次の役割で構成されています:	承認管理者は、通常、組織の地域を担当し、その地域の承認プロセスを制御する必要があるが、Planning 管理者の役割を付与される必要はないビジネス・ユーザーです。承認管理者の役割のユーザーは、プロセスの所有権を手動で取得し、承認の問題を解決します。次のタスクを行います: <ul style="list-style-type: none"> ● 承認プロセスの制御 ● 書込みアクセス権を持つ Planning ユニットに対するアクションの実行 ● 担当内の組織の所有者とレビュー担当者の割当て ● 副次元の変更または検証ルールの更新
承認所有権割当て者	Planner の役割に割り当てられているタスクを実行します。 承認所有権割当て者は、書込みアクセス権を持つプランニング・ユニット階層のメンバーに対して次のタスクを実行します: <ul style="list-style-type: none"> ● 所有者の割当て ● レビュー担当者の割当て ● 通知対象のユーザーの指定
承認プロセス・デザイナー	プランナと承認所有権割当て者の役割に割り当てられているタスクを実行します。 承認プロセス・デザイナーは、書込みアクセス権を持つプランニング・ユニット階層のメンバーに対して次のタスクを実行します: <ul style="list-style-type: none"> ● 副次元と書込みアクセス権を持つエンティティのメンバーの変更 ● プランニング・ユニット階層のシナリオとバージョン割当ての変更 ● 書込みアクセス権を持つデータ・フォームのデータ検証ルールの編集

役割	説明
承認スーパーバイザ	<p>プランニング・ユニットを所有していない場合でも、書込みアクセス権を持つプランニング・ユニット階層のメンバーに対して次のタスクを実行します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● プランニング・ユニットの停止と開始 ● プランニング・ユニットに対する任意のアクション <p>注： 承認スーパーバイザは、所有していないプランニング・ユニットのデータは変更できません。</p>
アド・ホック・グリッド作成者	アド・ホック・ユーザーが行えるタスクの実行に加えて、スマート・スライスを作成したり、保存します
アドホック・ユーザー	アド・ホック機能を使用してデータ・フォームを分析します。
タスク・リスト・アクセス・マネージャ	このリリースには適用されません(将来の使用のために予約されています)。
プランナ役割	
プランナ	承認およびアダプタ・プロセス用のプランを入力および送信します。他のユーザーが作成したレポートの使用、タスク・リストの表示と使用、自分自身への電子メール通知の使用可能化、Smart View を使用したデータの作成が可能です。
対話型役割	
対話型ユーザー	データ・フォーム、Smart View ワークシート、ビジネス・ルール、タスク・リスト、Financial Reporting レポート、およびアダプタ・プロセスの作成と維持を行います。予算プロセスを管理します。Smart View でのスマート・スライスの作成、セル詳細の消去機能の使用、すべてのプランナ・タスクの実行が可能です。対話型ユーザーは通常、部署の責任者や事業単位のマネージャに割り当てます。
ビュー役割	
表示ユーザー	Oracle Hyperion Planning データ・フォームとライセンスを所有するデータ・アクセス・ツール(たとえば、Oracle Hyperion Financial Reporting、Oracle Hyperion Web Analysis および Smart View)を使用して、データを表示および分析します。典型的な表示ユーザーは予算プロセスの期間中および最後にビジネス・プランを参照する必要のある経営者です。

Profitability and Cost Management 役割

標準 Profitability and Cost Management の役割

表 17 標準 Profitability and Cost Management の役割

セキュリティ の役割	説明
パワー役割	
管理者	<ul style="list-style-type: none"> ● ユーザー・アカウントとセキュリティ役割の作成および維持の他、Shared Services を使用したユーザーのプロビジョニング ● Essbase データベースの生成 ● アプリケーション・プリファレンスの設定と維持 ● 共通次元とメンバーの選択を目的とした、Performance Management Architect を使用したモデル・データベースの構築 ● ステージ、ドライバ、POV、ドライバ選択、割当て、アプリケーション・プリファレンスなどのモデルにおける要素の作成および維持 ● POV コピー、計算、検証、データ入力、トレース割当ての実行 ● Essbase への配置と計算スクリプトの生成 ● データのインポートおよびエクスポート ● ライフサイクル管理ユーティリティを使用した、開発またはテスト環境から本番環境などの別の環境へのデータのレベル上げ。 ● Profitability and Cost Management のモデル・コンポーネントのバックアップおよび復元。 ● ビジネス・オブジェクトに加えられた変更を監視します。 ● Profitability アプリケーションのホーム画面へのアクセスによる、Exalytics 用アプリケーション・ローダーを使用した Profitability and Cost Management アプリケーションの作成、管理、登録、複製および更新。 ● Smart View の「接続」画面からのクエリーの作成、編集、コピー、削除および起動 <p>注： パワー・ユーザーは、タスクの実行に特定のセキュリティ役割を必ずしも必要としません。たとえば、パワー・ユーザーが「計算」画面から計算を実行する場合、このアクションによってタスクフローが内部で作成されて実行されます。パワー・ユーザーは、「タスクフローの管理」タスクから直接このタスクにアクセスする場合以外は、このタスクの実行に「タスクフローの管理」役割を必要としません。</p>
パワー・ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● ステージ、ドライバ、POV、ドライバ選択、割当て、アプリケーション・プリファレンスなどのモデルにおける要素の作成および維持します。 ● POV コピー、計算、検証、データ入力、トレース割当てを実行します。 ● Oracle Essbase に配置し、計算スクリプトを生成します。 ● データのインポートおよびエクスポート ● Profitability アプリケーションのホーム画面へのアクセスによる、Exalytics 用アプリケーション・ローダーを使用した Profitability and Cost Management アプリケーションの作成、管理、登録、複製および更新。 ● Smart View の「接続」画面からのクエリーの作成、編集、コピー、削除および起動

セキュリティの役割	説明
対話型役割	
対話型ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● すべてのモデリング画面の表示 ● データ入力画面でのデータの表示および変更 ● トレース割当ての表示 ● Smart View の「接続」画面からのクエリーの起動
表示ユーザー	<p>次の関数に対して表示のみのアクセス権を持ちます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● トレース割当て ● アプリケーション・プリファレンス ● モデル・ステージ、ドライバ、および POV
Shared Services の役割	
タスクフローの管理	タスクフローの作成と編集に必要。
タスクフローの実行	ユーザーによるタスクフローの実行と表示のみを可能にするために必要。この役割を割り当てられたユーザーは、タスクフローの作成や編集を行うことはできません。

詳細 Profitability and Cost Management の役割

表 18 詳細 Profitability and Cost Management の役割

セキュリティ の役割	説明
管理者	<ul style="list-style-type: none"> ● アプリケーション・プリファレンスの設定と維持 ● 共通次元とメンバーの選択を目的とした、Oracle Hyperion EPM Architect を使用したモデル・データベースの構築 ● レポート・ビューを作成してリレーショナル・データベースに配置 ● 次の機能を作成、読取り(表示)、更新、削除: <ul style="list-style-type: none"> ○ ステージ ○ ドライバ ○ POV ○ ドライバの関連付け ○ 割当て ○ アプリケーション・プリファレンス ○ 計算ルール ○ 計算プロセスの割当て ○ ジョブ・ライブラリおよびステータス ○ テーブル登録 ● 次のタスクを実行: <ul style="list-style-type: none"> ○ POV コピー ○ 検証 ○ 配置 ○ 計算 ○ ジョブの停止 ● ライフサイクル管理ユーティリティを使用した、開発またはテスト環境から本番環境などの別の環境へのデータのレベル上げ。 ● データのインポートおよびエクスポート ● Profitability and Cost Management のモデル・コンポーネントのバックアップおよび復元。 ● ビジネス・オブジェクトに加えられた変更を監視します。 ● Smart View の「接続」画面からのクエリーの作成、編集、コピー、削除および起動 ● Profitability アプリケーションのホーム画面へのアクセスによる、Exalytics 用アプリケーション・ローダーを使用した Profitability and Cost Management アプリケーションの作成、管理、登録、複製および更新。

セキュリティ の役割	説明
パワー役割	
パワー・ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● ユーザー・アカウントとセキュリティ役割の作成および維持の他、Shared Services を使用したユーザーのプロビジョニング ● レポート・ビューを作成してリレーショナル・データベースに配置 ● Profitability アプリケーションのホーム画面へのアクセスによる、Exalytics 用アプリケーション・ローダーを使用した Oracle Hyperion Profitability and Cost Management アプリケーションの作成、管理、登録、複製および更新。 ● Smart View の「接続」画面からのクエリーの作成、編集、コピー、削除および起動 ● 次の機能を作成、読取り(表示)、更新、削除: <ul style="list-style-type: none"> ○ ステージ ○ ドライバ ○ POV ○ ドライバの関連付け ○ 割当て ○ アプリケーション・プリファレンス ○ 計算ルール ○ 計算プロセスの割当て ○ ジョブ・ライブラリおよびステータス ○ テーブル登録 ● 次のタスクを実行: <ul style="list-style-type: none"> ○ POV コピー ○ 検証 ○ 配置 ○ 計算 ○ ジョブの停止 <p>注： パワー・ユーザーは、タスクの実行に特定のセキュリティ役割を必ずしも必要としません。たとえば、パワー・ユーザーが「計算」画面から計算を実行する場合、このアクションによってタスクフローが内部で作成されて実行されます。パワー・ユーザーは、「タスクフローの管理」タスクから直接このタスクにアクセスする場合以外は、このタスクの実行に「タスクフローの管理」役割を必要としません。</p>
対話型役割	
対話型ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● 次の機能を表示(読取り): <ul style="list-style-type: none"> ○ ステージ ○ ドライバ ○ POV ○ ドライバの関連付け ○ 割当て ○ アプリケーション・プリファレンス ○ 計算ルール ○ 計算プロセスの割当て ○ ジョブ・ライブラリおよびステータス ○ テーブル登録 ● Oracle Hyperion Smart View for Office の「接続」画面からのクエリーの起動

セキュリティの役割	説明
表示ユーザー	<ul style="list-style-type: none"> ● 次の機能を表示(読取り): <ul style="list-style-type: none"> ○ ステージ ○ ドライバ ○ POV ○ ドライバの関連付け ○ 割当て ○ アプリケーション・プリファレンス ○ 計算ルール ○ 計算プロセスの割当て ○ ジョブ・ライブラリおよびステータス ○ テーブル登録
Shared Services の役割	
タスクフローの管理	タスクフローの作成と編集に必要。
タスクフローの実行	ユーザーによるタスクフローの実行と表示のみを可能にするために必要。この役割を割り当てられたユーザーは、タスクフローの作成や編集を行うことはできません。

Performance Scorecard 役割

表 19 Performance Scorecard 役割

役割	説明
パワー役割	
上級マネージャ	Oracle Hyperion Performance Scorecard 環境での管理機能を提供します
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーおよびグループに Oracle Hyperion Performance Scorecard 役割をプロビジョニングします。
対話型役割	
基本	実績収集管理のその他の役割で、レポート、スコアカード、メジャーおよびイニシアチブへのアクセスを付与します
対話型	主に設計者の役割で、対話型ユーザーはすべてのビジネス・オブジェクトに対し作成と変更のアクセス権を持ちます。この中にはマップ(責任、戦略、因果関係)の他、スコアカード、イニシアチブ、メジャーなどが含まれます。

Strategic Finance 役割

表 20 Strategic Finance 役割

役割	説明
パワー役割	
管理者	Oracle Hyperion Strategic Finance を管理し、エンティティへのアクセスを割り当てます。対話型ユーザーの機能も含まれます。管理者は次のタスクを実行します： <ul style="list-style-type: none">● サーバーの追加および維持● データベースの追加および維持● ユーザーの追加および維持● ユーザー・グループの追加および維持● エンティティの作成および維持● レポートの設計および表示
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーおよびグループに Oracle Hyperion Strategic Finance 役割をプロビジョニングします。
対話型役割	
基本ユーザー	エンティティにデータを入力し、シナリオおよびサブ勘定科目を追加し、レポートを表示します
対話型ユーザー	対話型ユーザーは次のタスクを実行します。 <ul style="list-style-type: none">● エンティティの作成および維持● エンティティへのデータの入力● シナリオの追加● サブ勘定科目の追加● 次元の追加● レポートの設計および表示
ビュー役割	
表示ユーザー	エンティティおよびレポートを表示します

Provider Services 役割

Oracle Hyperion Provider Services には、管理者パワー役割が用意されています。これにより、ユーザーは Essbase サーバー・クラスタを作成、変更および削除できるようになります。

Data Integration Management 役割

Oracle Hyperion Data Integration Management では、Shared Services によって確立されるセキュリティ環境を使用しません。

Data Integration Management の現在のバージョンにアップグレードしようとしていて、Shared Services の認証プラグインを使用した場合、Oracle Hyperion Shared Services の認証プラグインを登録解除した後で、Informatica PowerCenter リポジト

リ・マネージャを使用して、ユーザーを再作成する必要があります。このバージョンの Data Integration Management はネイティブの Informatica 認証にのみ対応しています。

詳細は、Oracle Hyperion Data Integration Management のドキュメントを参照してください。

FDM の役割

表 21 FDM の役割

役割	役割のタスク
管理者	アプリケーションを管理して、アクションを実行します。すべての場所へのアクセス権と、すべてのフォームおよびコントロールに対する権利を持ちます。
基本レビュー担当者	財務管理問題をレビューします
基本レビュー担当者と送信者	レビュー後に認証または評価を送信します
中間 2-9	<p>データをターゲット・システムにロードします。中間レベルの役割は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management 管理者によって定義されます。ユーザーにユーザー・レベルが割り当てられると、そのユーザーは、そのレベル以上を割り当てられたすべてのオブジェクトへのアクセス権を持ちます。</p> <p>たとえば、中間 7 の役割を割り当てられたユーザーは、中間 7 から中間 9 および「すべて」の役割を使用してアクセスできる各オブジェクトへのアクセス権を持ちます。パワー・レベルおよび中間 2 から中間 6 がアクセスできるオブジェクトには、中間 7 ユーザーはアクセスできません。</p>

FDME の役割

表 22 FDME の役割

役割	役割のタスク
管理者	アプリケーションを管理し、アクションを実行します
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーおよびグループへの Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition の役割のプロビジョニング
ドリルスルー	<p>FDME および FDM に適用します。ソース・システムにドリルスルーできるかどうかを制御します。</p> <p>FDM では、この役割は許容されるタスクとして中間の役割に適用され、ソース・システムへのドリルバックを制御します。</p> <p>FDME では、この役割はユーザーが FDME のランディング・ページにドリルできるかどうかを制御し、ソース・システムへのドリルを制御します。</p>
統合の作成	FDME メタデータおよびデータ・ルールを作成します。

役割	役割のタスク
統合の実行	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition メタデータおよびデータ・ルールを実行し、実行時パラメータを入力します。トランザクション・ログを表示できます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ユーザーは、Oracle General Ledger からデータを抽出する必要がある場合、データ・ルールを実行するには、この役割を付与される必要があります。
GL ライトバック	ERP ソース・システムへのデータのライトバックを使用可能にします。

Integrated Operational Planning 役割

表 23 Integrated Operational Planning 役割

役割	役割のタスク
プロビジョニング・マネージャ	ユーザーおよびグループに Oracle Hyperion Disclosure Management 役割をプロビジョニングします
IOP 管理者	Oracle Integrated Operational Planning を管理します。IOP 管理者はモデルの変更、ACL ページへのアクセス、すべての Integrated Operational Planning タスクの実行を行うことができます。
IOP ユーザー	Oracle Integrated Operational Planning アクションを標準ユーザーとして実行します。



EPM Systemのコンポーネン ト・コード

役割は、ユーザーが EPM System アプリケーションで実行できるタスクを定義します。登録されたすべての EPM System アプリケーションからの役割は Oracle Hyperion Shared Services Console の役割ビューで表示できます。

役割ビューには役割の名前と内部製品名である製品コードが簡単な説明とともにリストされます。EPM System 製品は表 24 に示されています。

表 24 EPM System 製品で使用される製品コード

製品コード	製品名
HUB	Shared Services
CES	Oracle Hyperion Shared Services (ワークフロー)
HP	Planning
ESB	Essbase
BPM	Oracle Essbase Studio
ESBAPP	Essbase アプリケーション
BPMA	Performance Management Architect
HAVA	Reporting and Analysis 製品は次のとおりです: <ul style="list-style-type: none">● EPM Workspace● Web Analysis● Interactive Reporting● Oracle Hyperion SQR Production Reporting
FDM	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management
EAL	Oracle Essbase Analytics Link for Hyperion Financial Management
EALBRIDGE	Oracle Essbase Analytics Link for Hyperion Financial Managementブリッジ
HFM	Oracle Hyperion Financial Management
HPS	Oracle Hyperion Performance Scorecard
HPM	Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
CALC	Oracle Hyperion Calculation Manager
HSF	Oracle Hyperion Strategic Finance

製品コード	製品名
AIF	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition
IOP	Oracle Integrated Operational Planning
BIEE	Oracle Business Intelligence Enterprise Edition
DISCMAN	Oracle Hyperion Disclosure Management
FCC	Oracle Hyperion Financial Close Management
BIP	Oracle Business Intelligence Publisher



EPM System製品へのアクセス

この付録の内容

Shared Services へのアクセス	95
EPM Workspace へのアクセス	95
Administration Services コンソールへのアクセス	96

Shared Services へのアクセス

9 ページの「Shared Services Console の起動」を参照してください。

EPM Workspace へのアクセス

EPM Workspace は、Oracle Hyperion Planning および Oracle Hyperion EPM Architect などの Oracle Enterprise Performance Management System 製品や、Oracle Hyperion Interactive Reporting および Oracle Hyperion Web Analysis などの Oracle Hyperion Reporting and Analysis コンポーネントにアクセスできる Foundation Services コンポーネントです。URL を使用して EPM Workspace にアクセスするとログオン・ウィンドウが表示されます。

▶ URL から EPM Workspace にアクセスするには:

1 次に移動します:

`http://Web_server_name:port_number/workspace/index.jsp`

URL の中で、Web_server_name は Foundation Services が使用する Web サーバーが実行されているコンピュータの名前を示し、port_number は、Web サーバー・ポートを示します。たとえば、`http://myWebserver:19000/workspace` のようになります。

注: セキュアな環境の EPM Workspace にアクセスする場合、プロトコルとして https (http ではなく) を使用し、セキュアな Web サーバー・ポート番号を使用します。たとえば、`https://myWebserver:19443/workspace` のような URL を使用します。

ポップアップ・ブロックが原因で EPM Workspace が開かない場合があります。

2 「アプリケーションの起動」をクリックします。

- 3 ログオン・ウィンドウで、ユーザー名とパスワードを入力します。
- 4 「ログオン」をクリックします。
- 5 EPM Workspace で「ナビゲート」を選択します。
- 6 「管理」 > 「Shared Services Console」を選択します。

Administration Services コンソールへのアクセス

この手順を開始する前に、Foundation Services、Web サーバー、Oracle Essbase および Administration Services が稼働していることを確認します。

▶ Administration Services コンソールを URL から起動するには:

- 1 次に移動します:

`http://Web_server_name:port_number/easconsole/console.html`

URL の中で、`Web_server_name` は Oracle Hyperion Foundation Services が使用する Web サーバーが実行されているコンピュータの名前を示し、`port_number` は、Web サーバー・ポートを示します。たとえば、`https://myWebserver:19000/easconsole` のようになります。

注： セキュアな環境の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace にアクセスする場合、プロトコルとして `https` (`http` ではなく) を使用し、セキュアな Web サーバー・ポート番号を使用します。たとえば、`https://myWebserver:19443/easconsole` のような URL を使用します。

- 2 「起動」をクリックします。
- 3 Administration Services コンソールをダウンロードしてインストールします。
- 4 Oracle Essbase Administration Services の「ログイン」画面で、ユーザー名およびパスワードを入力します。
- 5 「OK」をクリックします。

用語集

ID 外部認証におけるユーザーまたはグループの一意の識別です。

Shared Services レジストリ ほとんどの EPM System 製品の EPM System 配置情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を管理する Shared Services レジストリの一部です。

アクセス権 リソースに対してユーザーが実行できる一連の操作です。

アップグレード ソフトウェアの新しいリリースを配置し、以前の配置から新規配置へデータとプロビジョニング情報を移行するプロセスです。

アプリケーション 1)特定のタスクまたはタスクのグループを実行するために設計されたソフトウェア・プログラムです(スプレッドシート・プログラム、データベース管理システムなど)。2)必要とされる特定の分析のセットまたはレポートのセット、あるいはその両方に対応するために使用される、次元および次元メンバーの関連するセットです。

アプリケーション移行ユーティリティ アプリケーションとアーティファクトの移行に使用されるコマンド・ライン・ユーティリティです。

アーティファクト 個別のアプリケーションまたはレジストリ・アイテムです(スクリプト、フォーム、ルール・ファイル、Interactive Reporting ドキュメント、財務レポートなど)。オブジェクトとも呼ばれます。

移行 アプリケーション、アーティファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から本番環境にコピーします。

移行監査レポート 移行ログから生成されるレポートです。アプリケーションの移行に関する追跡情報を提供します。

移行スナップショット アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行定義ファイル(.mdf) アプリケーションの移行に使用される移行パラメータを含むファイルです。これによりバッチ・スクリプトを処理できます。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

管理対象サーバー 内蔵された Java 仮想マシン(Java Virtual Machine (JVM))で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

外部認証 Oracle EPM System 製品にアプリケーション外に格納されているユーザー情報でログオンします。ユーザー・アカウントは、EPM System によって維持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は、Oracle Internet Directory (OID)または Microsoft Active Directory (MSAD)などの企業ディレクトリを使用して、外部サービスによって実行されます。

グループ 複数のユーザーに同様のアクセス権を割り当てるためのコンテナです。

コンテキスト変数 タスクフロー・インスタンスのコンテキストを特定するために、特定のタスクフローに定義される変数です。

集約役割 Hyperion 製品内の複数の事前定義された役割を集約するカスタム役割です。

手動ステージ ユーザーの操作が必要なステージです。

シングル・サインオン(SSO) 一度ログオンすると、再度認証を要求されることなしに複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

自動ステージ ユーザーの操作を必要としないステージです(データ・ロードなど)。

ステージ 1)通常は個別のユーザーにより実行される、タスクフロー内の1つの論理ステップを形成するタスクの説明です。ステージには手動と自動の2つのタイプがあります。2)Profitability では、組織内での割当てプロセスのステップを表す、モデル内の論理区分です。

ステージ・アクション 自動ステージで、ステージを実行するために呼び出されたアクションです。

製品 Shared Services における、Planning や Performance Scorecard などのアプリケーション・タイプです。

セキュリティ・エージェント Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On または CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

タスクフロー ビジネス・プロセスの自動化を指します。手続きのルールに従って、あるタスクフロー参加者から別の参加者にタスクが渡されます。

タスクフロー・インスタンス タスクフローの状態と関連データが含まれる、タスクフローの単一のインスタンスです。

タスクフロー管理システム タスクフローを定義および作成し、その実行を管理するシステムです。定義付け、ユーザーまたはアプリケーションのやりとり、およびアプリケーションの実行可能ファイルが含まれます。

タスクフロー参加者 手動ステージおよび自動ステージの両方について、タスクフローのステージのインスタンスに関連付けられているタスクを実行するリソースです。

タスクフロー定義 ステージとステージ間の関係のネットワーク、タスクフローの開始と終了を示す基準、および個別のステージに関する情報(参加者、関連アプリケーション、関連アクティビティなど)から構成される、タスクフロー管理システムのビジネス・プロセスです。

タスク・リスト 特定のユーザーについて、タスクの詳細ステータスを示すリストです。

統合 Shared Services を使用して Oracle Hyperion アプリケーションでデータを移動するために実行されるプロセスです。データ統合の定義によりソース・アプリケーションと宛先アプリケーションの間でのデータの移動が指定され、データの動きのグループ化、順序付けおよびスケジュールが決定されます。

トークン 外部認証システム上の1つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された識別です。

同期 Shared Services とアプリケーション・モデルの同期です。

同期済 モデルの最新バージョンがアプリケーションと Shared Services の両方に存在する状態を指します。「モデル」も参照してください。

認証 安全対策としての ID の確認です。一般に、認証はユーザー名およびパスワードに基づきます。パスワードおよびデジタル・シグネチャは認証のフォームです。

バックアップ アプリケーション・インスタンスの重複コピーです。

ビジネス・プロセス 集合的にビジネス上の目標を達成するための一連のアクティビティです。

フィルタ データ・セットで、特定の基準に従って値を制限する制約です。たとえば、特定のテーブル、メタデータ、または値を除外したり、アクセスをコントロールしたりする場合に使用されます。

プロジェクト 実装でグループ化された Oracle Hyperion 製品のインスタンスです。たとえば、Planning プロジェクトには Planning アプリケーション、Essbase キューブ、Financial Reporting サーバー・インスタンスが含まれることがあります。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権を付与するプロセスです。

変換 アプリケーションの移行後にアーティファクトが宛先環境で正しく機能するように、アーティファクトを変換するプロセスです。

モデル 1)アプリケーション固有のデータ表現を含むファイルまたはコンテンツの文字列です。モデルは Shared Services により管理される基本データであり、次元と非次元のアプリケーション・オブジェクトという2つの主要なタイプがあります。2) Business Modeling で、検査対象の領域からの業務および財務上のフローを示し、また計算するために接続されたマシン・ネットワークです。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ユーザー・ディレクトリ ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所で、リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。最も普及したユーザー・ディレクトリとして、Oracle Internet Directory (OID)、Microsoft Active Directory (MSAD)、Sun Java System Directory Server などがあります。

ライフサイクル管理 製品環境間でのアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーティファクトの移行プロセスです。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマットおよび注釈の情報のストレージの場所です。

リンク (1)リポジトリ・オブジェクトへの参照です。リンクは、フォルダ、ファイル、ショートカットおよび他のリンクを参照できます。(2)タスクフローで、あるステージのアクティビティが終了して次のアクティビティが開始するポイントです。

リンク条件 タスクフローのステージを順序付けるためにタスクフロー・エンジンにより評価される論理式です。

ロード・バランシング 複数のサーバーに要求を分散すること。これによって、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。

索引

A - Z

Account Reconciliation Management 役割, 82

Profitability and Cost Management
役割, 87

Disclosure Management 役割, 81

Essbase

アプリケーションの役割, 75

サーバー役割, 75

役割, 74

Essbase Studio

役割, 76

Essbase の役割

アプリケーションの開始/停止, 75

書込み, 75

管理者, 75

計算, 75

データベース・マネージャ, 75

フィルタ, 75

読取り, 75

FDMEET の役割, 91

FDM の役割, 91

Financial Close Manager 役割, 81

Financial Management

役割, 79

Foundation Services

Calculation Manager の役割, 74

Financial Management マネージャの役割, 74

Performance Management Architect 役割, 73

Shared Services 役割, 71

役割, 71

Integrated Operational Planning 役割, 92

LDAP, 14

Performance Scorecard

役割, 89

Planning

アプリケーションの役割, 83

Planning の役割

Essbase 書込みアクセス権, 83

一括割当て, 83

管理者, 83

対話型ユーザー, 84

表示ユーザー, 84

プランナ, 84

プロビジョニング・マネージャ, 83

Provider Services 役割, 90

Reporting and Analysis 役割, 76

ジョブ・マネージャ, 77

Shared Services Console

概要, 10

ショートカット・メニュー, 10

ツールバー・ボタン, 10

Profitability and Cost Management

役割, 85

Strategic Finance 役割, 90

EPM Workspace

アクセス, 95

WORLD, 35

あ行

アクセス

Administration Services , 96

EPM Workspace , 95

アクセス権, 24

Calculation Manager の役割, 74

Profitability and Cost Management , 87

Disclosure Management , 81

FDMEET , 91

Essbase , 74

Essbase Studio, 76

Financial Close Manager, 81

FDM , 91

Financial Management , 79

Financial Management マネージャ, 74

Foundation Services 役割, 71

Integrated Operational Planning , 92

Performance Management Architect 役割, 73

Performance Scorecard , 89
 Provider Services, 90
 Reporting and Analysis , 76
 Shared Services 役割, 71
 Profitability and Cost Management , 85
 Strategic Finance , 90
 アプリケーション
 Account Reconciliation Management 役割, 82
 Planning の役割, 83
 アプリケーション・グループからの除去, 21
 アプリケーション・グループへの追加, 20
 既存のアプリケーション・グループへの追加, 21
 削除, 23, 24
 定義, 19
 プロビジョニング情報のコピー, 23
 アプリケーション・グループ
 アプリケーションの追加, 20
 削除, 21
 作成, 20
 名前変更, 21
 アプリケーションレベルのアクセス, 24
 委任された管理
 委任された管理者, 28
 階層, 27
 管理者の作成, 29
 システム管理者, 27
 使用可能, 28
 プロビジョニング, 29
 委任された管理のプランニング
 委任プラン, 29
 ユーザー・アカウント, 29
 委任されたレポート, 34
 委任プラン, 29
 委任リスト
 削除, 33
 作成, 30
 変更, 32
 インポート/エクスポート・ユーティリティ(プロビジョニング・データ), 61
 オブジェクトレベル・セキュリティ, 24

か行
 階層
 委任された管理, 27
 監査レポート
 アーティファクト・レポート, 59

構成レポート, 59
 セキュリティ・レポート, 59
 管理
 ネイティブ・ディレクトリ, 35
 ネイティブ・ディレクトリ・グループ, 41
 ネイティブ・ディレクトリの役割, 46
 ユーザー, 36
 管理者
 名前変更, 37
 グループ, 17
 削除, 46
 作成, 42
 名前変更, 44
 ネイティブ・ディレクトリの管理, 41
 ネストされた, 41
 プロビジョニング, 54
 プロビジョニング解除, 54
 変更, 44
 構成レポート, 59

さ行

削除
 アプリケーション, 23, 24
 アプリケーション・グループ, 21
 アプリケーション・グループのアプリケーション, 21
 委任リスト, 33
 グループ, 46
 集約役割, 48
 ユーザー・アカウント, 40
 作成
 アプリケーション・グループ, 20
 委任された管理者, 29
 委任リスト, 30
 グループ, 42
 集約役割, 46
 ユーザー, 36
 「参照」 タブ, 10
 集約役割, 16, 46
 削除, 48
 作成, 46
 変更, 47
 使用可能
 委任された管理, 28
 事前定義済役割, 15
 製品固有のアクセス, 24
 セキュリティ

製品固有, 24
 認証, 13
 認証コンポーネント, 13
 ネイティブ・ディレクトリ, 14
 ユーザー・ディレクトリ, 14
 セキュリティ・レポート, 59

た行

タスク・タブ, 10
 タスクフロー
 作成, 66
 実行, 69
 情報, 63
 スケジュール, 68
 ステータスの表示, 69
 表示, 68
 編集, 67
 デフォルト
 ネイティブ・ディレクトリ・ユーザーおよび
 グループ, 35

な行

名前変更
 アプリケーション・グループ, 21
 管理者, 37
 グループ, 44
 ユーザー, 37
 認証
 概要, 13, 14
 グループ, 17
 グローバルな役割, 15
 コンポーネント, 13
 集約役割, 16
 事前定義済役割, 15
 ディレクトリの管理, 35
 役割, 15
 ユーザー, 16
 ネイティブ・ディレクトリ, 14
 エクスポート, 61
 グループ, 41
 グループの削除, 46
 グループの変更, 44
 集約役割の更新, 47
 集約役割の削除, 48
 集約役割の作成, 46
 情報, 35

デフォルトのユーザーおよびグループ, 35
 非アクティブなアカウントのアクティブ化,
 39
 プロシージャのバックアップ, 49
 役割の管理, 46
 ユーザー, 36
 ユーザー・アカウントの非アクティブ化, 39
 ユーザー・アカウントの変更, 37
 ユーザーの作成, 36
 ネストされたグループ
 継承ポリシー, 41

は行

表示
 委任されたレポート, 34
 ビュー・ペイン, 10
 ブラウザの問題
 ポップアップ・ブロック, 10, 95
 プロビジョニング
 委任された管理者, 29
 概要, 14
 グループ, 17, 54
 データのインポート, 61
 データのエクスポート, 61
 ユーザー, 16
 プロビジョニング解除
 グループ, 54
 プロビジョニング情報のコピー, 23
 プロビジョニング・データのインポート, 61
 プロビジョニング・データのエクスポート, 61
 プロビジョニング・レポート, 58
 変更
 アプリケーション・グループ, 21
 委任リスト, 32
 グループ, 44
 集約役割, 47
 ユーザー, 37
 ポップアップ・ブロック, 10, 95

ま行

命名ガイドライン
 グループ, 42
 ユーザー, 36

や行

役割

Account Reconciliation Management, 82
 Calculation Manager の役割, 74
 Data Integration Management , 90
 Profitability and Cost Management , 87
 Disclosure Management , 81
 FDMEE , 91
 Essbase , 74
 Essbase , 75
 Essbase , 75
 Essbase Studio, 76
 Essbase アプリケーション, 75
 Essbase サーバー, 75
 Financial Close Manager, 81
 FDM , 91
 Financial Management , 79
 Financial Management マネージャ, 74
 Foundation Services 役割, 71
 Integrated Operational Planning , 92
 Performance Management Architect 役割, 73
 Performance Scorecard , 89
 Planning アプリケーション, 83
 Provider Services, 90
 Reporting and Analysis , 76
 Shared Services 役割, 71
 Profitability and Cost Management , 85
 Strategic Finance , 90
 管理, 46
 グループへの割当て, 54
 グローバル, 15
 集約, 16, 46
 集約の更新, 47
 集約の削除, 48
 集約の作成, 46
 事前定義済, 15
 定義, 15
 割当ての除去, 54
 ユーザー, 16
 アカウントの非アクティブ化, 39
 削除, 40
 作成, 36
 名前変更, 37
 認証, 13
 認証コンポーネント, 13
 ネイティブ・ディレクトリでの管理, 36
 非アクティブのアクティブ化, 39
 変更, 37
 命名ガイドライン, 36

ユーザー・アカウント
 委任された管理, 29
 ユーザー・アカウントのアクティブ化, 39
 ユーザー・ディレクトリ
 定義, 14
 ユーザーの非アクティブ化, 39
 ユーザー・プロビジョニング
 別のアプリケーションへコピー, 23

ら行

レポート
 委任されたレポート, 34
 監査
 アーティファクト・レポート, 59
 構成レポート, 59
 セキュリティ・レポート, 59
 プロビジョニング, 58

わ行

割当て
 アクセス権, 24